川柳雜誌

主幹・麻生路郎

七月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和五年七月一日再發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌　第七卷　第七號

川柳雜誌社發行

川柳雜誌 第七卷第七號目次

感想・評論

柳壇の人々(二)　麻生路郎
竹馬居雜筆(六)　蛭子省二

研究・其他

旅のこゝろ　麻生路郎
十觀句の研究(四)　福田山雨樓
月評　路郎　山雨樓
卓を圍んで　ひろし　琴人
亂耽　安井ひろし
欣女死後　高橋かほる
街に住めば(二)　福田山雨樓
三十三才　松丘町二
無題錄　小島素心
乞食　森石竹
アベエニューより　平井蒼太
川柳獨語　尾崎海洋人
瞑想　出口雨町
三題　伊藤絲之助
憂鬱　田中正坊
五月幟　
川柳特効藥

BUILDING

一路集(募集句)

新綠見送　麻生葭乃選
方角　橋本綠雨選
本社六月例會　朝田新水
本社社友會　中見光路共選
丸山公二記
安井ひろし記

各地柳壇　橋本綠雨
杭全町MEMO　路生
編輯後記其他　K生
表紙(ある停車場の横)題字　小出檜重

創作

川柳塔　住田亂耽
安井ひろし　出口雨町
朝田新水　伊藤絲之助
庄萬よし　酒井駒人
岩崎柳路

◇

若井たけし　阿部閑生
中見光路　木山青砂郎
松村敏郎　須崎豆秋
丸山公二　熊本黃蛾

粒々集

富士野鞍馬　神尾三休

近作柳樽

水谷鮎美　松丘町二
松盛琴人　高橋かほる
福田山雨樓　伊藤愚陀
長谷川一徹　橋本綠雨

森石竹　西杏三
安田里十九　池田雪峰
櫻井圓角　中澤濁水
西村市公

長崎柳秀　諸家

七月例會

▼日時　七月六日(日曜)午後七時
▼場所　南區清水町電停西入北側　端の坊
▼兼題「肉」三句
▼會費　三十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

暑中御見舞の廣告を募る

▽奮つて申込まれたし△
柳友交誼のため左の便法を設く
▼一口　五拾錢
幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分原稿はなるべく簡單に願ひます
▽申込期限　七月十日迄(八月號に掲載)

大阪市住吉區杭全町六〇三
事務所　川柳雜誌社
電話天王寺一一六七番
振替大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替を御利用の上前金に願ひます。(三錢以下の切手代用でも差支ありません)

近作柳樽

路郎選

それからは解雇するのに腐心する　金澤　旭
滅相な其の上娘貰ふなぞ　同　同　虹
笑つたり泣いたり踊つたり女　同　同
道徳の尺度に叛き生きてゐる　同　同
玉を突くキューの先から金が逃げ　同　同
個性なるかな金をうさみぬ　同　同
二號さはあまり商品扱ひな　神戸　同
戀愛にかけては女ハッキリし　浪人　同
瓢箪の存在なぞは忘れられ　街　同
銅像は今の思想に見くびられ　同　同
急行車花咲く驛を皆さばし　同　同
靴下が股の奥までつゞくモガ　同　同
尋ねたい事だけ社長笑顔なり　大阪　同
ジンワリさ他所の値下を話される　四五磨　同
久しぶり逢ふて帽子を脱いで見せ　同　同
刀根山へ行かねばならず酔ふてゐる　同　同
刀根山へ名残りの惜しい月がさし　同　同
ためしみに海にながしても見る心　松山　武子

遊園扇子供ばかりで火をいこし	同	
青空へ何かをしめすつもりにて	同	
辻り臺おこなもひこりまじつてる	同	
賣り聲こ別れて金魚浮いてゐる	同	
ゆうひまつかだ いまやくけむり	同	大阪 葉平
つまがやかれるけむりみてたつ	同	
ろくがつのあをばの土にうづめむ	同	
ぬれたおしめがそのまゝにある	同	
つまさりしさみしさ拾日つめなごきらむ	同	長野 柳兒
ストップウオッチに爭ひを試される	同	
虫けらの戰術死ぬる眞似もする	同	
死ぬ場所にされデパートの登へて居	同	
土産屋に一群みんな國訛り	同	
この散歩ニューヨークまで延ばさうか	同	神戸 可村
ドライブのあいだに履歴きゝおはり	同	
忘れてた内ポケットに觸れてみる	同	
寢て居れば寢てゐて家族つきまこひ	同	
根こそぎに買はれてみれば淋しまれ	同	朝鮮 如空
産婆役ですこ隱居がもてゝ居り	同	
賣れぬこて問屋に罪があるでなし	同	
押入へ頭つゝこむ程さむし	同	魚崎 吟女
ようあきもせず急行の普通車のこ		

かしは手の近ふ稲荷のあるもよし　同
嬉しさは大根も土のついたまゝ　同　同
あの上にまだ樹を入れる庭の趣味　同
妻の寢顔俺は幸福なのかしら　愛知　文醉
夜逃けするならばゞ犬もついて來る　同　同
本當の母だゞ聞いて腹も立ち　同　同
燕の巣笑ひ聲なら寢られよう　同　同
素晴らしい才覺誰も寄せつけず　東京　山門
病人の直ぐ聞き譯けて淋しがり　同　同
あんまりな白さへ少しづゝ背き　同　同
十八の春愛猫をだきしめる　平塚　やよい女
婚養子同權だけは認められ　同　同
女教師の南瓜の花に似た姿　同　同
蝶々をつかまへたさの下駄を脱ぎ　神戸　一鴉
荷を揚ぐる聲が揃ふて海は晴れ　同　同
晴れ切つた戻りは傘を車にし　同　同
子が二人養子の酒もつよくなり　尼崎　虚白

鐘紡爭議

三割の騷ぎをよそに膝枕　同　同
青龍刀きつゞなびくゞ思ひきや　同　同
十五六養父の顔に飽いてくる　神戸　卯生
椿をひらふ子等へ塀がある　同　同

オカッパの襟足が伸びてゐるおぼろ　同
いひ負けてやつぱり君も若いなあ　姫島　二竹
ポッカリと廣告だけの野の廣さ　同　同
お妾が通る〳〵の硝子窓　同　同
不意の金貧しき友を訪ね見ん　神戸　志郎
社を退けた身へ圓タクがつきまとひ　同　同
病床へのぞかず歸りうたがはれ　同　同
生きるてふ極まりもなき暗さなる　大阪　蒼太
十圓の夢を見てゐるたはけたり　同　同

モルフィネとすり替へて置いたと云ふ

饂飩粉が人を救ふと云ふ哀れ　同　同
子供またフトンの裏をすうてゐた　大阪　裸人
母親をそこのけにした晴着なり　同　同
中味の程を知れラムネのびんよ　同　同
神鹿だつて腹が減るなり　大阪　凡々子
たりなさを言はず女は聞いて呉れ　同　同

金策に來て待たされる

一枝は首吊るによい庭の松　同　同
干物を入れよと風が向を替へ　大阪　縫子
嬉しさは父に似た子が生れて來　同　同

長女出産

乳がこぼれるよ口をあきな　同　同

紅へ出れば秘書とか云へる女あり　神戸　艶笑
太陽のない生活だ氣が荒らし　同　同
新聞を小脇に出るも姿なり　同　同
約束を反古にした夜も眉をひく　松江　喋朗
メーデーだ父も參加をしてる筈　同　同
世の中は俺とお前とあればよし　同　同
市場のもぎりにみてきた山だよ　神戸　鎌月
俺をしつてる雲々々　同　同
友を捨てもう髪をわけてゐる　同　同
女房としてはお酒も飲ませたい　大阪　南牧
借金は有るが体は極く達者　同　同
羨しいほど正確に行く時計　同　同
すこやかにあればと笑ふ日もなくて　別府　晃卓
女房のパラソル俺の服のやけ　同　同
合理化の聲を失業きく斗り　同　同
世間話へ花賣が來る　神戸　睡花
獨身を水の不便な家に居る　同　同
くつろげば握りの味や酒の味　同　同
子が出來るまでの夫にひきくらべ　大和　はつ女
生け花の赤き娘に立ちかへり　同　同
辨當の温みの中に送り出し　同　同
あんな奴へ母くれてやるかたみ分け　不明　無名

行く春をおしむ娘の訪問着　同
つゝかけの下駄で來てゐる裏畑　同
疑獄のなんのと悪化して來た　松本らつぱ
すくすくと伸びてこれから親がゝり　同
地ひゞきがして資本家の通るなり　同
人間の通りあらそふ犬と犬　豊橋登志雄
この耳へひゞくは戀の歌ばかり　同

琵琶湖周遊

島めぐりあれが石山ここが瀬田　姫島方眠
呑の日はながし紫雲英の上に寢ん　同
戀故の雨を祈るも羞かしく　名古屋草石
素面では這入れぬ歳にジャズ戀し　同
男ならあんな口をば利かしやせぬ　滿洲草明
入選の通知に貧しさも忘れ　同
顔立ちの下卑に生れて嫁き遲れ　金澤木偶人
三段に水が落ちてる崖青葉　同
螢ひよつこり白粉の顔に合ひ　大和勝二
燕は歸つて來たがまだ獨り　同
鉢だけの土を信じて咲いた花　大阪八歩
大都會屋根へ木を植へ鳥を飼ひ　同
玩具屋でさはつただけでついてくる　明石了念
水の輪を喜ぶままに石を投げ　同

溺愛だなどこうるさい他人の目　鳥取　耕民
煙よ埃よ大阪の現實よ　同　同
人生を歎じ續けて藥嚥む　島根　龍村
百姓にあまんじ雨にぬれてゐる　同　同
結婚難ままよ獨りで生きてやれ　岐阜　誼女
學者ハゲですよで先生うれしがり　同　同
廣告の旗大人にも呉れる　神戸　桔梗
日曜の机へ旭さゞいてゐる　同　同
干した下駄取れば蚯蚓は長う伸び　大阪　大夢子
髭剃れば何處からか來る初夏の風　同　同
麗人をきわどく襲う風も初夏　京都　無冠王
誰れ人か絹裝束で來る音ぞ　同　同
憧れの都は戀を知つただけ　大阪　英賀夫
初戀の今朝ポマードの伸びもよし　同　同
なぐれなぐれなぐれと情婦もつれつく　島根　專路
失業苦女給募集のまゝ貸家　同　同
頑として動かぬ父をかへりみる　大和　翠峰
小遣ひを五勺の酒にかへて飲み　同　同
妻はまだめが出るものと信じて居　神戸　不然
もの云へば金の要ることばかりなり　同　同
妻と子の外には牛がゐるばかり　同　九葉
象牙の箸親子がみんな遊んでゐる　同　同

牡丹よ牡丹よ朝から美しい涙　森小路　素心
生きてゐる甲斐もなし日記をやめる　同　同
きつかけを金にするこはいゝ手際　大阪　楚外
メーデーは只堂々こ濡れるここ　同　同
蚤こ蠅俺こ共存共榮し　平塚　城月
必ずしも處女を求めず求婚し　同　同
入營の留守丸髷の重たそう　松山　夢郷
愛人に昨夜の夢は語るまじ　同　同
花嫁のハイヤに道をさへぎられ　大阪　夕鐘
電話すりやヒスの女給が先に聞く　同　同
意見殺ろした賛成も食ふ爲めや　同　沒食子
已が意志通りにならぬ子が儲け　同　同
又カンフルか白い天井をじつこ見る　松山　逸名
死線こはこんなものかや春寂し　同　同

遺兒を失ひて

叱つては母のないのを不憫がり　吳　光哉
死ねばこて今の心を逃がそまい　同　同
起しては乳ない蚤よ俺を喰へ　大阪　明佳
斷然こ酒は止めぬこ醉ふてゐる　島根　麗亟
花散れば患者窓から目をそらし　大阪　双車
尖端を歩むに子供多すぎて　同　憲太
奥様か知らねご指輪光るだけ　平塚　宮女

ステッキはくさめを一つして通り　愛媛　計加
習はせて塲所に出せば不覺なり　鳥取　樂之雨
人間につまゝれてゐる猫の首　神戸　重陽子
ミもかくも近所の手前服で出る　大阪　英郎
ハンマーで毆りつけたい春の人　金澤　冬青
張り扇にも眞打ミ云ふ惱み　武庫川　四方路
吹き除りを言譯にして腰を据へ　桑ヶ池　可章
凱旋のやうに女工は退けてくる　大阪　素峰
弟よ屋根に花まで咲いてるよ　島根　巨柿
檢査官眉をひそめる癖があり　大阪　吐句坊
紫にあやめ咲く日の女文字　滿洲　登美坊
屋根瓦起せど見えず雀の子　島根　夢二
二個連れミ下からきめる下足番　大阪　麓生
締られて瓢簞細ふなつたよう　同　碧水
草に寢てひミり五月の陽につかれ　金澤　好次
寂光へ人間の非を悟りけり　東京　歸一
木賃宿今朝は飴屋が先づ出かけ　桑ヶ池　正坊
ダイナモは今か今かミ待つてゐる　松江　一夢
紫よ白よミ藤の茶店らし　豐橋　芙蓉
噫もつたいない今日一日も悲なく　大阪　當り矢
横柄に釣錢くれる販賣部　同　凸瓢改丹頂
父を怨んで父の業を次ぐ　大阪　村樂

十八の春病になつてゐた　蛍ヶ池　二三夫
損した事にも理屈をつけてくれる妻　兵庫　白水
この邊は仲仕が通る氷店　大阪　大黄
接吻の味を少女にむさぼられ　畝傍　羅
お情けの椅子に冷い年をさり　松山　楓
片戀の歌のみ書いて二十才なり　金澤　青帆
あんまりだ神の試練と思へども　旭　花
子もないにそないに貯めてどうする氣　蛍ヶ池　松露
お向ひも上衣を脱いだとこの窓　大阪　炭車
御先祖に濟まぬ不景氣續くなり　同　無鬼
ドン底さ埃埃の中に住む　同　朝雨
マネキンも春のちまたにわらひかけ　岡山　汀雨
怠け者今宵一夜の花に暮れ　大阪　笑四
子を負ふた夫をまんざら笑はれず　大聖寺　溪鶯
旅費にして歸る鮮人賣りに來る　大阪　愚圖坊
珍味屋に有るを知らずに旅路から　山口　一羽
桑が伸び過ぎケゴにはこはそうだ　大阪　鯉友
伊勢の旅烏羽から生きた海老を提げ　愛知　花蝶
借金がありやこそ俺は働くさ　大阪　旦洲
まちがつた儘でもらつた盲判　兵庫　美也光
靴下へ緊縮のきれあてあり　大阪　秋霊
　　島根　櫻ン坊

大洋に換えてウッカリ一時間　釜山　骸花

勤め振り妻はついでに見て戻り　別府　綠汀

花嫁の姿は笑ひくづれても　大阪　觀月

降れば降れ今日の休みを寢て暮らそ　鳥取　湖山

餡パンで辛抱しこく野球場　大阪　菊路

同情の瞳の中へ遺族立ち　京城　瓢二樓

合宿の陽へ新入生の行李　大阪　山抱子

髭面を撫でゝ貧乏性に慣れ　奚　仙人掌

人形の衣裳に母こ娘は疲れ　大阪　明果

手應があつたよチョット笑つたよ　同　灯舟

里行に初めて乘せる乳母車　島根　紫光

今日に來て明日に嘯くイズムなる　大阪　沐天

賢妻こ云ふのが廢物利用をし　奚　落葉

父母のもつれの中にひがんでる　大阪　亂子（亂調子改メ）

生きてゐたい證據に藥はなさない　金澤　今雨

反對はあれど只まつ直ぐに生きるのみ　大阪　鶴峯

お布施もろうてこゝろはだ〳〵　蟹ヶ池　武郎

手荷物も有つて見殘す女親　大阪　山月

吸殼を捨てゝその上蹴りもする　大分　蚊郎

言ふものが買へて淋しい病んだ人　大阪　正博
笑ひ出す迄叮嚀にあやまつた　愛知　枯骨
失業にあらねど夫働かず　大阪　スエノ
まけさした金は孫への土産なり　京都　丁の字
人命保護なんて世の中大つきいな　大阪　洋太
情夫の側とは知らず保護願ひ　兵庫　香仙
もう年期あける船場の朝を掃き　大阪　あきら
拜啓と何度も書いて後が出ず　蛍ヶ池　芳秋
もう搾られる事にもあきた動くまい　大阪　柳次
肺病と言つても人は聞きいれず　蛍ヶ池　重郎
ごん底の家から出でしモガであり　大阪　龍北
院長よ施す術もない身です　松江　華雪

第一回大阪漫畫展にて

漫畫から飛び出たやうな二人連れ　大阪　志洋
蚤一つ俺の腕をばねじて逃げ　石川　吉詳
成行に委すではない自暴自棄　大阪　北人
貧乏が三代つゞき村を立ち　松山　紫石
娘より親が自慢の雛祭　大阪　憲坊
傷跡をしみ〴〵見てる日向ぼこ　蛍ヶ池　石松子

入院を月給日まで待たされる　大阪　桃太郎

池の小舟藤に釣られてあるやうに　泉北　京哉

マルクスの卸した通り賣れぬなり　大阪　桂枝

むつかしい話はぬきで醉ふつもり　愛知　青笛

青疊の上には俺の夜具だけだ　大阪　海洋人

鼻ひけへ年増ぬからず酌をする　同　春陽

打つ鍬の先から蛙こんで春！　石川　柳月坊

もう一昔にもなる女の横顔　大阪　曉風

レベルなぞ下つてゐるこ思はれず　平塚　縫子

夢を見て嬉しがつてる人間さ　大阪　樹光

炭燒けばこれも人かこ笑はれる　同　紫萠

夢をすて實用の身に生きたし　同　テッオ

背な向けて愛人乳をふくませる　同　山茶花

何だからアメリカ主義が通るのか　愛媛　空山

病室の窓越に見る靈柩車　大阪　一騎

やり場所のない手を組めば金のここ　同　與詩夫

買つて呉れこ云はぬだけに淋し　同　さだを

釣つてゐる土手へ追手のロケーション　京都　呑空子

子の夢を横取りさして呉れないか　大阪　無名

人様のお金儲けに使はれて　明石　啞聲

柳壇の人々【2】

麻生路郎

川上三太郎君

川上君はある意味に於て柳壇のッェッペリンであるかも知れない。

思ひ出したやうに、飄然として旅に流れ出る。それでゐて風景は嫌ひだといふ。

○

とぼけた顔、人を食つた態度が、川上君の賢明さを包んでゐるので、意外に近づき易いところがある。が、しかし與みし易しとして無闇に近づかうものなら、忽ちにして烏賊の磨墨にも比すべき皮肉の巨彈を投げつけられるだらう。

○

川上君は物ぐさ黨としても人後に落ちない方であるか、その物ぐさに似ず『新川柳一萬句集』の編纂がある。その句集の廣告文に編者川上君を名人として祭り上げてあつたが、この敬稱を單に廣告文の讃辭だとして讀過した人も多からうが自分などは寧ろ、うなづかされ、ほほえまされた一人である。

假りに『名人』といふ看板を持ち廻つて川柳家の肩にのせて見て、据りもよく又持ちこたへ得る者を求めたとしたら、物ぐさで、しかも鬼才縱横、名作迸出の川上君の肩へ落ちつくのではなからうか

○

川上君の話術は、のべつ幕なしに飛び出す機智の舞踏である。從つて多くの話題には、それ〴〵にある種の魅力を持つてゐるが單にそれだけでは、對手を感心させるに過ぎない。時にくたびれさせるに過ぎない。斯くいふことは川上君の話術を表通りから窺つた素通り觀に終らせることになる。

川上君は、あれでなか〳〵しみじみとした話をする。その話の底には友情が根を張つてゐる。君の眞實を觀る力は凝つて機智となり皮肉となつて湧出するが、その友情は、それらの機智や皮肉の外殼に災され、眩惑されて他人の知るところとならないのだ。

○

その句風を知るために柳誌『すすめ』の第四卷十二號からその二三を拔く。

冬の日を　手紙一本な　つかしや
十二月　某日　猫　の　歩く　を見
鯛ちりや　降る雨ながら　畫ながら
友だちの　うしろ　姿の有難味
亡姪を想ふ——
死んだ子に貸した背中に羽織着て

○

川上君の句に、動物を詠んだ句の多いといふことはかなり有名で　馬や犬や猫などを詠んだ句は殊に多い。しかしながらそれが單なる寫生句に終つてゐないで川上君一流の鋭い觀察がその句を透して流れてゐることを知らなければならぬ。

動物の呼吸が人間の呼吸・動物の行動が人間の醜惡であることさへも味讀させられる。それは　ジャック・ロンドンが狼や犬を藉りて社會主義を闡明したのにも類するだらう。川上君の句にさうした目的は無いにしても、その句からうける興趣は深い。

右に掲げた句には川上君のしみ〴〵とした一面が遺憾なく出てゐると同時に、君の尤も得意とする技巧を窮知することが出來やう。

○

君が曾て川柳雜誌に寄せた『迎へ火のあとで——』の文中に

『父を名人と呼ぶ事を許したまへ。私の死んだ父は小さな金槌で煙管をコツ〳〵打ち上げるしがない職人風情だつた。然し晩年から死後にかけてそのこしらへた煙管が、同業者は元より　袋物商、骨董界に珍品として取扱はれ、貴重品として愛玩されて居るのを見聞する時、私は泌々その不肖の子である事を痛感する』

と述べてゐるが、君は寧ろ一職人の伜としてこの世の光をうけたことに感謝してゐるやうでもある。

○

川上君が川柳に指を染めたのは明治四十年ごろではないかと思ふ。

大倉商業の出身で天津の支那商館に勤めてゐた事もあつた

近年新聞記者をやめてから著述と放送に其の日を過ごしてゐる。居は南品川にある。年は不惑、愛妻と差し向ひの生活、

川上君が　かつて柳樽寺派に屬してゐた事と、酒の好きな事とは　餘りに知られてゐるので省いた。

（寫眞は川上三太郎君、最近ＪＯＡＫで撮つたもの）

主觀句の研究（四）

福田山雨樓

故矢田冷刀氏の句に『母の手の尊し節の高さにも』と云ふのがある（川柳雜誌第六卷第一號）が自づと頭の下がるやうな嚴肅さに打たれる。『節の高さ』と云つたところにそれが女性であると云ふ聯想から或る温情的なユーモアを感じるのであるが句全體にみなぎる主觀精神は矢張り母への感謝と敬慕とを訴へてゐるのに外ならない。母に對して抱いた高潮した感情を手の指の節の高さによつて具象化してゐるのである。全く母の手を取つて押し戴きたい程の感激に滿ちた心持ちが句の上にあふれてゐるのを見遁すわけにはゆかない。

僕は曾て『まこもに見ると母の老けたる』と云ふ句をものしたことがあるが、久しく國を出てゐる身にとつて、たまに逢ふ母のなつかしさは云はずもがなである。ところが母と向き合つてしみ〴〵語つてゐるその間にふと、母の正面の眞顏を捉へた視線が意外に老け給ふたことに氣付いたときの、驚きと淋しさとは一度に自分の頭に覆ひかぶさつて來て、一寸筆紙に盡し難いものがあつた。と共に心の中ではいつ迄も老け給はぬ母ならめと切に〳〵祈つたものである。こうした心境は面白半分に句を作るとしたら、何の興味もないことであらうが、自分の眞實の心持を出したいと念ずるものにとつては、實に眞劍な叫びであり祈禱ですらあるのだ。

こうした心の底から叫び出す言葉の如何に、嚴肅であり眞劍であるかは云ふ迄もないことであるが、それだからと云つて、只無暗に感傷めいた言葉をさらけ出したからとて、必ずしも第三者の胸底に迄反響するものではない。卽ち表現の六ヶ敷さはそこにあるので、主觀句には殊にさうした缺陷の多いことは注意を要すると思ふ。

以上は主觀句として割合はつきり出てゐる方である。

母親の素足に丈夫そうな爪　蝶二

これは番傘第十五卷第七號に發表された課題吟『素足』（水府氏選）の天位をかち得た句であるが『母秋の達者な胸が少しあき』（水府氏の句）とやゝ同想異曲であるやうに思はれるが何れもよく母の康こまめまめしさを禮讃し恩謝してゐる感じが、そのユーモアの中にうかゞはれるのが面白いと思ふ。又その母の人となりや年齢とか氣性とかが交取れて句の迫眞力を強くしてゐることも、敬服に値する着想であり表現であると思ふ

けれどもどちらかと云へば、素足の句は母と云ふ至つて懷しい親しいものゝ中に極めてユーモアに富んだ一部分を捉えたことに一半の興味がかゝつてゐるので、句の中心をなすところの主觀精神としては、輕いユーモアの氣分を出すことにあつたのではなからうかと忖度されるのである。

そしてかゝる主觀精神はこの場合、句の描寫的表現の成功に壓倒されて、隅の方にちゞこまつゐる感じがする。最初から母に對する感謝とか云ふ心持が主であると云ふよりか、寧ろ母への情感は第二として、何等の批判も愛情も加へることなしに、一圖にユーモアの描出によつてシーンを味はふとした態度をうかゞふことが出來るやうに思ふ。

更に云ひ換へれば、母の姿を客觀してその客觀の中からユーモア味に富んだ部分を撰り出した制作と云つた方が適當なのではなからうか。

そこでこう云ふ描寫的手法の秀れた句は、往々客觀句として見らるゝのであるが、この句が假りに客觀から生れたものであつたとしても單なる客觀そのものに終つてゐないことは勿論、ユーモアの中におのづからなる母への敬慕の感情がとけ込んでゐる點、卽ち豐富なる川柳味を胚胎することからして、客觀に背負つたところの主觀句であると稱することが出來ると思ふ

尤もこれは、主として客觀に依つて生れた句でも表現さへうまければ句主に豫期すらしなかつた主觀や情緒が景品のやうに飛び出して來るといふ意味では勿論ないので、ユーモアの感じを強調しようとする主觀精神の中に含まれた複雜素が、表現の巧さに依つてより餘韻的に響くと云ふのに外ならない。だから反對に如何に主觀的の句であつても、その表現かまづかつたならば折角の主觀精神も却つて鼻について、詩として對者に迫つて來るものが稀薄になるおそれがあることに氣付かねばならぬと思ふ。強ひられた感情と云つた形になつては決してよき鑑賞を買ふことは出來ない。

只こゝに注意を向けたいのは、主として客觀によつて生れた句にあつても、その表現において優れたものがある場合には、第三者の聯想力、鑑賞力が手傳つて、或る程度の吸引性をもつと云ふ強味の添加があることである。これは川柳の如き短詩型のものにあつては、可成り重要なことで『表現は內容を決定す

る』と云はれる程に表現の問題か大切であることを忘れてはならぬと思ふ。

故冷刀氏には又『働けば母は嬉しいものに見る』と云ふ句があるが、これなどは極めて情味豊かな中に母の心理を深く見きはめてゐる。母の嬉しさうな姿と共に、自分のすなほな姿をも振返つて微笑してゐるのである。句主の孝養深い心掛けと精勵とが言外に溢れて、第三者にも親しみ深くその人格をしのばさずにはおかない。母の喜びを喜びとする歡喜に浸つてゐる心境は飽く迄句主の微笑に滿ちた主觀精神を具象化したものであると思ふ。所謂主觀の客觀化とでも云ふべき句であらう。

白痴とは思へど母の意見なり　つばさ

これは川柳雜誌第六卷第七號一路集『白痴』（雀郎氏選）の天の句である。『也』で止めた句は多く穿ちの畑にあるらしいと曾て路郎氏は「句作上の常套語」の中で言つてゐられるが、この句は白痴の母に對する穿ちではあるが、單なる客觀と理屈を超越した情味が汲めども盡きない。これは前の句の反對に客觀の主觀化とでも云へやうか。

母に關する主觀的名吟を左に少し拾つて見やう。

チト俺を女房の母買ひ被り　餘念坊

母の愚痴母と悲しくなつて來る　雨吉

なんとなく母は濟まないやうに病み　太郎丸

縫ひたてを寒さうに着る痩せた母　涙光

舌打ちに淋しさ拙の身のまわり　雨月

聞けば泣き出しさう母の藥取り　綿糸

（以上川柳一九二四年集より）

お前お前とよく喋舌る母　松郎

母一人まだ居殘りを待つて呉れ　眠聲

この母の子が貧相な顏ばかり　駒人

そんならと母はへそくり出すならん　翠峰

よき人とのみきく母のしたはしさ　羊司

我母の一生を風の音がする　莢豆

ほろ〳〵として小兒科の扉をあけ　零骨

母に似た顏で生れよ罪の子よ　三笑

夏休み母のしなびた乳房を見る　意紫

（以上　川柳漫畫「累卵の遊び」より）

以上の例句を見てもわかるように、題詠中心に於て優れた句と云ふのは、どちらかと云へば、客觀によつて生れた着想のうまい句に落ちるやうである。これは句作衝動の相違からくるのであつて、一面止むを得ないところであらうと思ふ。しかし課題吟にあつても靜かに自己のほんとうのものを出さうと心掛けるならば、優れた主觀句が生れることは前掲最後の句を見てもわかる。

それから雑詠中心に於ける優れた句は、鋭い大きな主觀に立脚したのが多いやうである。この心理を平たく考へて見ると、題詠中心的な心持ちにあつては、土を貫つて粘土細工をする樣なもので、待ち構へて腕にまかせて句をこしらへるといふ風な傾きがあるのではないかと思ふ。これに對して雑詠中心的な心持ちにあつては、原始人が山野を跋渉して自分の食糧を求めるのにも似に眞剣さに出發するのではないかと思ふ。

しかしさう云つたからとて、主觀句である爲めに川柳として價値が低いとか云ふのでは無論ないので、寧ろその反對に主觀句の方に川柳味の稀薄を嘆ずる句が多いことを心配せねばならぬのである。

こゝで古川柳に於ける母の句を少しばかり拾つて、前掲の主觀句と著しい對照を示して見たいと思ふ。

死なば死にやなどゝ恐わ〳〵母は云ひ
嫁入前の白髪も抜きへらし
さうであらうさうであらうと里の母
うれしい日母はたすきでかしこまり
何の氣もないに母親あぶながり
あればかり男かと母邪けんなり

これ等の句は概ねユーモラスな客觀の事象を捉へて、そのまゝ叙した客觀句ならぬものはないではないか。曾て川村花菱氏は『社會批評と人生描寫』（柳樽と汎玉川に就ての斷想）―川柳雑誌第六卷第一號―と題して、柳樽の句作態度は客觀の批評と云ふ立場から見下してゐると云ふことを說かれたが、柳樽の名句には流石に心理を穿つたことを云つてゐる。そのすぐれた機智と諷刺には感服の外はないが、興味本位に走つた柳樽からは、われ〳〵對者に訴へるべく句主の主觀精神の迫つてくるものが少いことはもの足らないと思ふ。

こころがこのもの足らぬ柳樽こそは、われ〳〵が曾て川柳への唯一の手引であり、渡し舟であつたのだ。われ〳〵は正しく柳樽の洗禮を受けて柳壇への人となつたのである。しかも柳樽の精神は根深くわれ〳〵の心の一隅に植付けられてゐるのであつて、こもすればその芽が頭を上げやう〳〵し勝ちになるものである。

然るに一方には純な藝術的な歩み方の自覺の上に立たされてゐる。即ち前稿にも述べたやうに、純藝術的な作句衝動を否定出來ないのみか、それに最後の價値を認識してゐるものである

この事實に即したジレンマを如何にして解決すべきかを主觀句の研究に殘された最後の問題にしたいと思ふ。

（續く）

月評 卓を圍んで

路郎　琴人　亂耽　ひろし　山雨樓

近作柳樽　山雨樓提出

湯ざめせぬ間に寢る癖の指の皺

艶笑

山雨樓……或る有閑階級の冗漫な生活を、捕へて居る。指の皺を氣にするやうな、贅澤な生活を痛擊して居る反面に、此句から一日の仕事に疲れた勞働者の、汗の尊さを高調した精神を汲みとる事が出來ると思ふ。

琴人……僕は此の句を 人生の老境に入つた心の淋しさを、詠つたものだと思つて居る人生句としては眞實を物語つて居る句で、非常の佳句と迄は云はれぬが、可成な句であると思ふ。新らしい人から云はせると、何處か弛緩して居るやうで迫力が乏しいと 云ふかも知れぬが、併し夫れは此の句が七五五と云ふ調になつて居るので、そう云ふ風に思はれるのだと思ふが兎に角何處かに 隙のある樣で、伸びたとこのある樣に思はれてならない

山雨樓……老境に入つた人の、淋しさと云つたやうなものを 詠んだものであるとすれば下五の指を捕へた事が 腑に落ちないやうに思ふ。

ひろし……そんなに年寄と 云ふ意味ではないのだらふ。はち切れそうな若さの過ぎた、初老と云ふ人の心境である。從つて此の句から、山雨樓氏の云はれるやうな、勞働者の汗と云ふやうな事は聯想する事が 出來ないやうに思ふ。

山雨樓……僕は勞働者の健康美を誇る 精神を考へる事に依つて、此の句の內容を深めるやうに思ふ。

路郎……勞働者と云ふ見方は、少しく考へ過ぎではあるまいか。寧ろ此の句は、作者の心境を詠んだものであらふと思ふ。單に平凡な多少有閑的な生活を詠つたもので、下五の「指の皺」から考へて見るのに、ゆつたりと湯につかつて居たために、指の皮膚の緊張が弛んだ意味を表はして居るので、左迄深い意味を持つた句ではない。

山雨樓……入浴によりて、氣分がゆつたりとする事に依つて、湯上りの肉体美は、寧ろ血行がよくなるので、一層若々しく見えるのでは無からふか。

ひろし……それであるのに、指に皺が見えるので、淋しさを感じて居るのであらふ。湯ざめせぬ間に寢る癖であるから、幾分病氣勝の人であらふ。

琴人……山雨樓氏の見方も 受けとれぬでもないが、もしそうだとすれば、「指の皺」のその皺を「つや」か何かにして貰はないと、何うも受けとりにくい。

山雨樓……「指の皺」は皺を氣にして居ると云つたやうな氣分を出して居るんだと思ふ。つまりそう云ふ事に囚はれて居る 生活振りを、指摘した點が作者の狙い處であるやうに思はれる。ひろし氏が云はれたやうに、病弱な人の場合であると云ふ句ならば、一層平凡な報告に終つては居ないか。

ひろし……此の句はそれに過ぎないと思ふ。作者の生活を平凡に 詠つて居るのに過ぎない。つまり此の句は山雨樓氏の云はれるやうな、そうした生活を非難するやうな勢も皮肉も、持つて居ない。たゞその生活に浸つて衰へ行く身の哀れを歎じて居る姿を 觀取され

るに過ぎない。

琴人……僕は自説を主張して置きたい。

山雨樓……さつき此の句が 句主の生活を詠つたものであるかのやうに云はれたので、句主のそうした生活を 攻撃する事になつてはと云ふ遠慮から、此の句を平凡にして終つたと云ふやうな嫌ひがありはしないか。僕は「湯ざめせぬ間に寢る」迄は或は句主の生活を持つて來たのかも知れないけれども、下五に到つては句主の創作的精神に依つて 有閑階級の一面を指摘したのであるやうに思ふ。

亂耽……此の句は 心境に餘裕のある生活を詠つて居るだけで、夫れ以外には深い意味のない句と思ふ。それに、ては、此の句のリズムが非常に窮屈して居るのがそぐはない。

亂耽提出

文明よ機械よ俺は食ひはづし

容　山

亂耽……句全面に現代を完全に ボヴアーヘルムして居る 文明獸の魔手を呪つて居る強いものを感じる。「俺は食ひはずし」と云ふ齣も太く自分の氣持を云ひ放つて居る點がいゝと思ふ。

ひろし……新聞の見出しのやうな 生々しい字句を以て句が構成されて居る。而も夫れが嚴然たる事實である事によつて、此の句が力強く訴へるのであるふが、其處に此の句が詩美に訴へぬ缺點がある。

山雨樓……先程亂耽氏が 強いものを感じると云はれたが、僕は餘り感じない。もう斯う云つた思想は都會では 概念の殼になつて居る。夫れを田舍で珍らしがつて居ると云つたやうな感じしかやつて來ない。

ひろし……僕には一概に 概念から生れた句だとは思へない。作者の悲痛な体驗から出來た句であらふと思ふが、表現の生硬さがそうした非難を受けるのだと思ふ。併し「俺は食ひはずし」はいゝと思ふ。

亂耽……山雨樓氏は先に 概念の殼云々と云はれたが、此の句よりもより古きより陳腐な概念の殼が如何に現代の川柳壇にうよ〳〵して居ることよ！假令 此の句が概念の殼である事を認めても、現實に鋭角的な角度を以つて觸れて居る點を認めればならない。併し新らしいと云ふ事、それ自身は必ずしも褒めるべきではないと思ふ。

琴人……失業者か或は それと同等な環境にある人が、現代機械文明に呼掛けた悲痛な叫びと受け容れられる。現在都會に於ても全國を通じて百五十萬と豫想される 失業苦、それを思つて此の句を見る時、よりはつきりと作者の詠つた處の心境が 表現をなし得て居ると思ふ。

山雨樓……「俺は食ひはずし」は確かに此の句を概念そのものだけに 終はらして居ない事は受とれる。もし「俺は食ひはすれ」とあつた場合には、それこそ概念のそのものに終る處であつたであらうと思ふ。

路郎……機械文明を呪ふ聲が 既に新らしくないとしても、此の句は相當に纏つて居ると思ふ。併し表現の調律が弱い爲めか迫眞力に乏しい事を思はされる、其の點作者の一考を煩はしたい。

川柳塔　ひろし提出

丙　種　合　格

(一)司令官へゆつくりお辭儀して下り　亂　耽

(二)ぺこぺことなれしにまかせお辭儀す　綠之助

(三)施しのつもりでお叩首して置かう　光　路

ひろし……この句三句共腹の中から ほんとうに敬意を表してお辭儀して居ない所が 現代の世相を表してゐると思ふ。事程左樣に今の世のお辭儀と云ふものが 一つのアイロニー的擧措に過ぎないと云ふ事が覗はれる。

琴人……お辭儀が三句、そして三句共お辭儀の仕方が異つてゐる。こう並べた所で何と云つても大膽不敵にやつてこましてる 丙種合格國民兵がふるつてゐる樣に見へる。

路郎……(一)は表面人を食つた コーモラスな句ではあるが、なほその他にやれ〳〵助つたと云ふ喜びが心の底を 駈足してゐる樣に思はれて表面單純なお辭儀の如く、しかも解剖すると中々複雜な味を出してゐる。(三)は多少諦め的で、多少世にすれたと云ふ所があつて啄木などの歌にも こう云つた境地がある。その點をちよつと面白く感じた。三つの句の中で(二)の句が一番平凡に 詠まれてゐる。「ぺこぺこ」と云ふ樣な諧謔的な表現法を

とつてゐるにも拘らず何の皮肉も滑稽味も湧出さしてゐない。

山雨樓……先程三句共心からお辭儀をしてゐるのではないと言ふ評があつたが（三）の句の場合などは寧ろお辭儀しないでは居れない、何だかお辭儀を望まれてゐると云つた樣な氣分が自ずとお辭儀をさした所に面白味を見つけたもので、强ち輕薄な社會相を捉へたものだとかたづけて置けない樣に思ふ。（二）の句の場合は一見平凡な見方の樣であるが何だか考へさすものがある樣に思ふ。そしてこうしたお辭儀が如何に必要であるかと云ふ事を考へるときこの句は人情のある一端を確と捉へてゐる樣に思ふ。（一）の句に就いては路郎氏が述べられたので盡きてゐる。

琴人……今の（二）の句のお說、如何にこうしたお辭儀が必要であるかとまでの所のお說であつたけれども、私はこんなお辭儀がなくなつた世界が望ましい。さう云ふ半面をこの句に表はしてゐはせぬかと思ふ。要するに自嘲の句の樣に思はれる。

路郎……お辭儀必要論はちよつと面白い事だと思ふ。そして自嘲の句の說も肯ける。勿論その程度に於てこの句の存在はある譯であらう。然〻尙何處かに低調を感ずるものである。先程（三）の句に對して眞實のお辭儀でないと言ふ見方に多少の批評が加へられたけれども、これ等の三句は三句共眞實に頭が下るからお辭儀をすると云ふ意味の句ではない。「その點は確かに現代人の弱さを物語るものであらう。お辭儀すべき所へ何故反對に反り返へるだけの勇氣がないのであらうか。さう云つた句が一句や二句出來てもよからうと思ふ。

路郎提出

もう一度化けてくるよなとこじやなし

京郎

路郎……今の世につくづく愛想が盡きて居るが死ぬに死なれずしようことなしに生きてゐる人の生死觀である。靜かに冷かに批評してゐる態度は面憎い程辛辣である。

ひろし……澎湃として迫つて來る生活苦に耐えきれず一家心中など企てる現代の苦しい生活を穿つてゐると思ふ。昔は七度生きかへり恨みを素らすと云つた樣な死方をしたが、こんな苦しい世の中には再び化けて來たくないと皮肉な事を云つたものだ。

琴人……この「もう一度」は「死ねばさて」と云ふ意味あいの「もう一度」なのでせうか。

ひろし……作者は自分が死んでも化けては來ないと云ふ程深刻には詠つてゐない。

琴人……その「もう一度」を詳しく說明して欲しい。

路郎……勿論この作者は現在生きて今の世の無限地獄の狀態に面をそむけてゐる人なのであるから假に今死んでも「もう一度」この世の中に化けて出て來る樣な事はしない。そんなにこの世に執着も怨恨も呪詛も持つてゐないと云つたのである、

琴人……意味はそれで解りました。かう云ふ文字を使つてもいゝのでせうか。はつきりと正しい使い方でない樣に思はれる。

路郎……化けて來ると云ふのは從來この世の中に執着がある人が化けて來るので「もう一度」化けて來るのはこの作者の主觀が化けて來るのである。だからこの場合の「もう一度」には前に他の人が化けて來た事の省略が含まれてゐると見てもいゝ。

琴人……それではつきり解りました。

山雨樓……否定は肯定を生むと云つた言葉があるが句主は飽くまで諦觀的な思想に徹してゐるにしても現實の社會相から逃避してゐない所に人世の苦惱を肯定してゐるのであらうと思ふ。

琴人……作者は現代社會の嘘僞と僞瞞の多い事に想をつかした氣持を婉曲にこう詠つたものだと見る事がはつきりと肯かれた。

路郎……その例をこの作者の他の句によつてあげてみやう。「酒の味女のにほひイエスさま」「取り入りの巧さが鼻について來た」「生眞面目なのもうるさがられる」「なんぜもう不景氣なので手を焙ぶり」まあこれ位でいゝだらう。

亂耽……こう云つた表現の裏に人世の一部を享受せんとする作者の態度がうかゞはれて面白いと思ふ。（杏三、愚陀筆記）

東區東雲町二丁目一七三へ居轉。

出口雨町

川柳塔

□□□

○　住田亂耿

南京玉がきら〳〵光る夏の夢
男の靴と女の靴と摩天樓
シエード青く少女少女の顔を描き
龍騰寺雄を解するウエトレス
つのる憎悪と硫酸の色
モーターよ勞資何れに味方する
街の女と作業服そのまゝに
大衆を消化しきれる椅子の數
職にありついて足塲を上らされ
MAHJAN
牌に淫して絢爛の夢を追ふ

○　水谷鮎美

成佛に行儀正しく二女三女
蕎麥の花を見てゐてさびしくなりぬ
そう金におびやかされてもゐられない
いま落ちた梅の實石のあとがあり
引いてゆく刑事の方がみすぼらし
畫ひなかばけつに胡瓜浮いてゐる
にんげんのお伽噺の桃太郎
にんげんの別な姿は水車
にんげんの地をふむ足の死にちかく

○　安井ひろし

欣女逝きて

二月廿八日の日めくりのまゝなる
湯を沸かすガスの力なく燃えて

其後不在勝

還來の友に鍵を渡して外出する

M君嚴父に

初孫にすべてを許す春の宵

○　松丘町二

この女靜かすぎたりアスファルト
苦心は言はず乞はるゝまゝに花を剪る
水やれば乳吸ふ如し畑の土
生活の埃が溜る窓の鉢

○　出口雨町

グミ熟す思ひは十の日の戀よ
本當に惚れてゐるので口說けない
今俺は恐ろしいこと思ふてた
遊んでることがみんなに知れわたり
泥水に戀のボートのみじめさよ
白い西洋皿の上に苺のもつほこり
勝手に惚れてやいてゐるなり
出産へ情夫はいやな顏でゐる
お嬢さんと云はれいゝ氣になつてゐる
資本家の涙は醫者の前にだけ
踏む砂の熱さにプロを意識する

時節がら彼女の戀も行きつまり
カルピスを二人はふざけながら吸ひ
氣の弱い方が彼女に言ひよられ
獨身のつらさを云ふてねまをしき
噴水のほとりで逢ふは古い戀

○　松盛琴人

凡情の奥の誠へつきあたり

赤穗義士萱野三平邸を見る

三平の在所らしうに麥を打ち

箕面にて

山岳會青葉の中へ消えてゆき

○　朝田新水

朝々を君がうがひの前通る
殺さじと蚤見る度の神秘かな
新らしい心ひもじさ感じたり
東山見て暮したも當座なり

○　高橋かほる

抱き上げる子に夏帽が當るなり
剪り花へ會社の退ける時間なり
四疊半他所の二階で面白く
住吉へ連れて行きたき子とはなり

○　伊藤綠之助

尾崎咢堂翁の講演行脚

七十の皮肉柏手が媚びた

養蠶

桑をこぐ父と母との笑ひ聲

引きがねよ誰をうつ氣でひきしまる
座食して名門と云ふもおかしけれ
苗代に彼女は若し緋の襷
通帳にかつては萬の字が並び

福田山雨樓

○

大阪のごこ見て歸る蝙蝠傘の兒等
發送の封をなめてる實直さ
ぐみの實の赤さが兒等の眼をうばひ
鹽からき男の子にほろあまき女の子
朝寢すりやはつきり蚊帳がたるんでる

偶然民事訴訟に連坐(二句)

勝つたと冥土へ知らすすべのなき
黑白を待つに春すぎ秋がすぎ

祖母みまかる(二句)

ありし日はびんづるさまにも歸命頂禮
晩年はひまごを案じてはなみだ

庄萬よし

○

賀名生皇居跡に詣づ

行在所下の清水は齒にしみる

伊藤愚陀

○

雀の戀も初夏の颯々
善き事を數ふれば壁は笑ひぬ
十重二十重たゞ幻の春の宵
風呂の魔術に女眞裸
くよ〳〵すれば窓に夕立

居を移して

瓦の波に猫も怯へて

酒井駒人

○

自動車が止ればお客かと仲居
留守にする母佛壇へ手を合し
用だけを話して歸る義理の母
東京へきても首席を子はつゞけ
雨だれは別れた女にも似てる
又母が云ふ二人きりの兄弟
子煩惱と云はれて路次に古く住み
賣上を集め内金として拂ひ

長谷川一徹

○

群れ上る蟻の命ぞ青空よ
うそで良しやさしい言葉かけ給へ
いそしむをものたりなさで見て去りぬ
子が望む交通巡査が手を上げぬ
定期券今日も調べに來てくれし

岩崎柳路

○

この頃の私

ハルピン滯在中吟

貸し浴衣こんな所に穴があり
ハルピンへ來る名ばかりの視察團
ポータの智恵で兩替ちと儲け

麗かさ馬券の事で友が來る
大陸を流れる彼のローマンス
出雲まで習ひに行つた安來節

橋本　綠雨

○

枝振りへこちらの方が東かな
馬の足たがひちがひの音になり
軒切にちゞ借金を返す氣に
陽にやけて涅槃の顏にちかづけり
鈴蘭の花に利殖を考へる
ごちらが蹶られてゐるのかカフエーの夜

葉平君へ

ばら〳〵になつたお骨にあきれませう

若井たけし

◇

親の子親の子みんなセルを着て
キッスのあゞの合嗽水だわ
三味線箱も一度はあけろよ
この上に猫の子までは要りません

工場ストライキ（二句）

煙突の太さに壓倒されてゐる
月あほき工場の塀のひゞりごゞ

森　石竹

◇

水馬もつゞまへ〳〵氣が晴れた
散る時の花のまこゞが判るかよ
蜘蛛の糸が光る行水の湯があふれ
早や起きの木魚の背の丸さかな
葉がくれの螢ゞ見しはなやみかな

阿部閑生

◇

布團から手が二本出て午近し
遠き世の心地看護のはなし聲
卒業の寫眞一人は圓の中
虻一つ吸ひ込んでゐる瓜の花
蠅が來て唇うごく晝寢の兒
今日も亦憂ひ顏なる君ゞ逢ふ
相塲欄黑枠殊の外淋し

安西杏三

◇

爪切つて羨む事を忘れたり
繃帶の白きになれて日記かく
眞先きに切れたテープのやりゞころ

中見光路

◇

身重なる帶の赤さのいたいたし
夢でない手錠に白いハンカチフ
空つぽの心を白帆しばし乘せ
吹くだけが羅宇仕替やの金煙管

永田里十九

◇

市街地圖此處らあたりが我家なり
自分の子かゞ思ふ日のあり
助けるつもりうらまれた五十圓

宇治川吟行

書扳を出して長兵衛やつてのけ

、鍛、入の女　中女優にしてしまひ　木山青砂郎

◇

高下駄で追つかけてゐる戀をする
微笑んで寢てるあの妓の藥瓶
改心をする氣で墓に來たものを　池田雪峰

◇

日本をこんなもんかとあきらめる
こんな俺に金と女がして仕舞ひ
海の子兒供心の樣な色　松村敏郎

◇

キャレンダー四月も病める手にはがれ
病む夫へなり振りもなく稼ぐ也
親切な妻子へ笑顔出來ぬ癖　櫻井圓角

◇

二等車の女の用は化粧だけ
彌次喜多の昔も言ふて舟はゆく
ビジネスは第二と社長囁けり
初めから死ねる病ひでない辛さ　須崎豆秋

◇

思ひ出の氣拙いとこは目をつむり
フォーク握つて街の屋根見る
信仰か知らぬが蛇へ燈を供へ
針金へグサッと名刺さされたり
大阪に住んで居ると忘れてた　中澤濁水

◇

抱かれ出ると隣の枇杷へ指を差し
空腹の歸り目につく狐鮓
ボートレースみんな片寄る橋を過ぎ
履歴書を次々出して唯遊び
毎晩をそうも娘は着換へかね
不景氣が深刻だなと腰をかけ　丸山公二

◇

正直も場合によると嗤ふなり
きめてやりや遊ぶまいとはしんらつな
平等に平等にやる鷄のゐさ
ラブシーンがすんで咳いる婦人席
努力はむなし虫の足掻きよ
友達の百圓札も快し　西村市公

◇

この家も面白くなく病み續け
生きてゐる事風呂桶にかこまれて
チューリップ書齋の中の色となり
脈を見る間看護婦しんとする
下女の足敷居にゐても痛くなし　熊本黄峨

◇

剪り花をさかさに持つも女なり
廿一日施し米の一握り
藥湯で子供亡くした母と母

竹馬居雜筆

蛭子省二

（十二）佛法と慈悲……（諸鳥の愛護保存）

○盗賊の住家も古歌の德で知り　（古句）
○白涙のゆくゑを古歌でおんさばき　（同）
○おさばきも歌道もきいた鳥の聲　（同）

此の古歌とは、光俊朝臣の作

松の尾の峰しづかなる曙にあふぎてきけば佛法僧啼く

また

松の尾の山の奥にも人やすむ佛法僧となくにつけても

句意は、閑田耕筆物之部に

近古に京師に名ある醫師を夜更て迎ふる者あり、かれて相識人の名をいひたれば、速に輿に乘しを、頓て物にて押つつみ、數人で圍いづこともしらず勾引し行ぬさていと山深き所の大なる家の内に舁いれ家あるじとおぼしき者の金瘡を療ぜしめ、藥をこひて後あつく謝物をあたへ、また先のごとくかこみてかへしたりいかさまにも賊の隱れたる所とおぼしく、ものをも得たるからに默してはあられず、官に訟たれば、時の京兆尹板倉候其所のさまを尋給へども、東西をもわきまふる所なかりし旨、上の件をのべけるが唯一ツめづらしとおぼえしは、佛法僧と鳴鳥有しとまうす、候さては松尾成べし、松尾に此鳥をよめる古歌ありとて速に吏をつかはして、彼山深くもとめさせ給ひしかば、はたして賊の首領居りしとなり

以て松尾が有名な佛法僧鳥の棲息地なる事がわかる。が『今は彼の山にて聞たるといふ人なし、絶えたるにや』で、岡部康平の聞佛法僧鳥說に『此度の松尾山なるやいかならむ、こいささかなるしるべを尋ねて、華嚴寺と云ふ瓦葺にやぐりもとむ、黄昏と曉とになくめり、これもまづは、保々とのみ聞ゆめるをよく耳留むれば、鬱保於鬱保於とも、宇保於宇保於ともなくが呼子鳥の喝保於喝保於となくになん、いとやうおぼえたる、されどしひて思ひ寄ても、佛法といふ字の二音を唱ふるには通ひたりけにもおぼえずなむ一なご記して居る。

○うらむらく賊佛法の聲なくば　（古句）

此鳥の形、殊に鳴き聲に就ては、古來より諸說あり、近くも東詩人間に論議せられた樣で私も旅行の好機あらば耳を澄ましてみたい、渡り鳥であつて春季に南より來り、秋は雛をつれて去る、專門學者間には、布狀態も研究し盡されて居るらしく、古川柳には高野山が主として詠まれて居る。今日でも聽き得ない

事はないこか。比叡、寶來寺山、英彦山、木曾、大峰山　室生山、霧島山、福生寺　赤木山等々に住むこ記さる。

○ぼだい樹にさへづりさうな佛法僧　（古　句）
○三寶を鳥も音になく高野山　（同　）
○野　州では慈悲紀州では法の聲　（同　）

『野州では慈悲』こは、日光の慈悲心鳥の謂　同地には佛法僧鳥もゐたのであつた。倭訓栞に『夜陰に雄、佛法こ鳴き、雌、僧こ鳴く也、高野山醍光院に獵師の納めたる鳥の片羽あり、鐵砲にて打ちしに片羽のみ落ちて鳥は見えず、其羽色の美なる比類なし、世人知るものもあらず、是れも佛法僧鳥なるべしこ云ひ傳へり……契沖阿闍梨のいはく、佛法僧鳥のなくやうは、佛法こさやかに、ふた聲三聲なきて、のちにひくき僧こなくなんまうこ』…（笈埃隨筆に類した話其他二三の物語載せらる）…弘法大師の著性靈集中、觀心寺にての有名な詩

寒林獨坐草堂曉、三寶之名聞一鳥、一鳥有聲人有心、性心雲水俱了々

があり、又高野山通念集に、靈窟の閑林内に曉かた一夏の間啼くこある、上田秋成の雨月物語にも、此山（高野山）の草木石靈ならざるはあらずこなん…御廟のうしろの林にこ覺えて、佛法々々こなく鳥の音、山彦にこたへて近く聞ゆ、夢の目さむる心ちして、あなめづらし、あの啼鳥こそ　佛法僧こいふならめかねて此山に栖みつるこは聞きしかど、まさに其音を聞きしこいふ人もなきに、こよひのやどりまこここに滅罪生善の祥なるやこあつて

鳥の音も秘密の山の茂みかな

の一句を旅硯で記す事こなつて居る。

茅窓隨筆には　元來漢土に聞かざる鳥ゆえ、貝原の大和本草にもただ日本の鳥なりこのみ記せり、予謂ふに池上偶談に王得臣が麈史を引きて、安陸有念佛鳥、小於鵲鷄色青黃、唐韋蟾岳薩道林詩　靜聽林飛念佛鳥こいへり、此等にやあらん云々、漢土に居ない事はなく、滿洲朝鮮にも棲息する　是も唐にもあり』こ輶軒小錄には書いてある『すべて鳥獸の音、碓磨の聲、此方の聞き樣に依りて、樣々に聞き取らるゝこなり、深山幽谷禪佛の境には、常々佛事を談じ、佛語を談ずるに依りて、山獸の音も佛書に聞きなすこみえたり』こ、結末をつけてしまつては、興趣が乏し過ぎる。

古人は鶴は都々留々こなき遂に知々與々こ聞ゆ、雁は加々利々、鳥は加々良々、雉は紀々乎々、雀は須々受々、鶯は法華經をよむこ、佛法僧も亦然らずや、森德一郎氏の發表には、ブッポーこ二聲高く啼き續いてズット低くソーこ啼出したと、虛子氏はブッパンこ聽かれたそうだ…（秋成もブッパン〜こなくこ書いて居る）

○佛法と慈悲は兩顏をわけてなき　（古　句）
○慈悲と佛法とりわけて有難し　（同　）

「我國は御法の道の廣ければ、鳥もこなふる佛法僧かな」（夫木集）「うらやましいかに囀る鳥なれば、御法の外の聲なかるらん」（念仏上人）「慈悲心と啼聲きけば鳥にだに、しかぬ我身のはづかしき哉」（伴蒿蹊）「日の光高き御山にすむ鳥は、慈悲心と

こそなくべかりけれ」（鴨縣主祐爲）

『慈悲心鳥は或説に、佛法僧と雌雄なりといふは大なる誤なり此鳥たゞ日光に産す　他山絶えてなしと云ふ』

（古　句）

○慈悲心鳥も知つて住む日の御山

○鳥に慈悲瀧に裏ある御山なり

（同　）

『享和紀元辛酉の夏四月、蘭山先生台命を蒙りて常毛諸山に採藥す、予從之五月日光山にいたる。山に入るより屢其の聲を聞く、清亮にして慈悲心といふが如し、一日適々樹間に就きて其形狀を悉す、惣形體に似て大きさ白頭公より一層大きく、頭背翅尾共に黑し、胸腹淡褐にして細黑の横條又三行あり、嘴脚黑し』と、（桃洞遺筆）

○住む鳥も神慮に叶ふ慈悲の聲　（古　句）

○袖の斧おもはずゆるむ慈悲の聲　（同　）

今は慈悲心鳥も日光山から失せつゝあるは、餘りにも惜しい。

天明卯の夏、鵜川筑後守が比叡山にて此鳥の啼くを聞き『彼山（日光）にては明らかに慈悲と鳴て、心と後聲長く引けるこの澁り（比え）のは、心といふ聲のわかちよく聞かざれば知れがたし一と、而して栢庶瓦全なる人が登山して調査をした『あはやと心をしづめ耳を濟ますに、十聲計清らかに鳴つづけたる、嬉しさいはんかたなかりし』と（閑田耕筆、笈埃隨筆）

名田名刹への徒らなる經濟上のみの電化を悲しみ、古川柳に詠まれ殘されたる、鳥の上に愛惜の念を起こす。

（追記）宇治の醍醐寺が、醍醐天皇一千年の聖諱に相當するの故を以て、去四月六日より法筵が奉修され、併て記念事業の計畫の發表があつた、醍醐村の神戀社は機關誌「神戀」を刊行され、私は始めて記念號を手にした、中に京大の川村教授が醍醐の鳥の一文を寄せて居らるゝのを再讀して、諸鳥の愛護保存を力説して居らるゝは嬉れしかつた、私が本稿を草する意味も亦等しいからである、奈良には萬葉植物園なる二千八百餘坪の設計が準備をされたと聞く、今後の萬葉集研究家は幸福である天然物の保存事業に就ては當局もその官房内に、史蹟名勝天然紀念物保存協會なる長い名の組織もあり、同名の雜誌も鉛版に上せられて居るが此事たるや規則的制限にのみ束縛されては實効は擧らない、近代都市化に災されて生活形式の激變のため鳥の住む場所もないといふが如きは、悲しむべき思潮の現れである、神社佛閣の境内を自然のまゝに保存する事が、篤信上も學術上も亦感情上も緊要事である。

川村教授の文中にも、「つゐ近年まで喧しく啼いて居た高野山の佛法僧も、今では非常に減少して滅多に啼かず」とか「佛法僧が昔は此醍醐の山でも聞き得られたことが古書に載つてゐるから、渡りの季節には一晩位聽かれはせぬかとも考へる」とある、醍醐寺の鐘銘には、山城宇治醍醐山有佛法僧とあるから、寔に明かで、關西方面の川柳家諸氏は醍醐寺參拜の催があつて然るべしと思ふ。

〔又記〕其後、私が新聞をみて居ると佛法僧鳥の記事がかなり出る、一二を記して諸者の興味をそゝり度い。

◇靈鳥佛法僧　三河鳳來寺山の佛法僧。ボッ〳〵鳴きはじめ豊川鐵道では日曜毎に風流客のため電車賃割引

◇佛法僧發見　碓氷郡霧積溫泉の深山に靈鳥佛法僧が多數居る事發見發見者は高崎營林署長村田氏で村の人は何という鳥か名も知らずにゐたと

一路集

（募集句）

麻生葭乃選

新緑

新緑の山潑剌として まろし　翠夢
新緑に流れも派手な水の音　吐句坊
新緑のあした旅立つ衣更へ　明果
初夏の庭日ましにみどり深くなり　トシオ
若夫婦みどりの山にあこがれる　静香
新緑の蔭に忙しいコンパクト　虚白
新緑の風絹づれの音のやう　湖山
新緑の村へ日傘をさして行き　枯骨
盆栽の若葉小さく生きてゐる　空山
新緑の故郷へかへりてなつかしむ　兎糸夫
パラソルの色新緑に照り映えて　突支坊
若葉からしたゝる水を手に受ける　海洋人
新緑の何んのこゝ云ふて又誘ひ　鯉友
新緑をさぐる二人の足輕し　丁の字
初夏の戀緑通した陽を受ける　山茶花
新緑に妻の姙娠目立つて來　英賀夫
新緑の頃を待たるゝ許嫁ノブ

街路樹に時の惠みを見せてゐる　さだを
ひつそりとして新緑の別莊地　あきら
新緑にもらひの殖える檻の猿　樂乙雨
鯉幟新緑の風はらんで居　朝陽
新緑になりきつて土手河を抱き　柳兒
二タ株の朝鮮槇の葉の光　花蝶
新緑のかけへ藤椅子運ばれる　今雨
新緑へ誘へば友は病んでゐる　笑蓉
新緑の庭を嬉しく遊ぶ兒等　敏雄
電車待つ間も新緑の下に寄り　桂技
魔法瓶若葉の枝へぶら下げて　豆秋
新緑へ若き希望に燃えて立ち　誼女
登校の子は新緑の道を行き　正博
窓際へ新緑のびて蔭になり　山月
ねむ氣さす風新緑を辷つて來　吉祥
あの時を詫び葉櫻に又誘ひ　暢山
酒癖も出ず新緑へ無事な午後　四方路

杭全町 MEMO

雨　緑

▼函館、東京方面へ川柳行脚に出てゐられた路郎先生は五月卅一日無事に歸社されました。各地柳友の御好意を感謝してゐられます。

▼本社の同人・社友會を六月十四日夜社友の里十九居で久し振りに催しました、大いに氣焔をあげて十二時すぎに散會致しました。

▼同人庄萬よし君五月十二日賀名生古蹟へ探勝に行かれました。

▼社友中川めかく子君（金澤）は五月十九日鶴末舊街道を地造りの酒で舌鼓をうちながら鶴末町まで行つて櫻井六葉君に逢つて歸へられたそうです「乘ものは厭ひ健脚にはあらず」の句を寄せられました

▼中原圭二郎君は（平塚）が社友として入社されました活躍を祈ります。

▼本社螢ヶ池支部幹事植田湖舟君は同君の都合上田中紫浪君と幹事を交替されまし

口笛は樹々の緑の葉に響き　紫石
新緑に舊家の門は覗かれる　素蜂
新緑に朝日がさせば光る露　登志雄
新緑に行幸石が見當らず　雪峰
新緑へ近く病む床引ずらせ　憲坊
新緑に吾懐の偲ばれて　一水
新緑の牧場牛の聲に明け　柳次
ほてつてる顔を青葉の蒼く見せ　四五磨
團体で來て新緑に汗をふき　憲太
新緑の中に聞える茶摘唄　且州
病める身へ緑の色の目にしみて　八歩
新緑よかぜよ女よベーヴメント　笑四
新緑の風さはやかにセルの肌　耕民
新緑の風へ二階のお留守勝ち　麓生
セル着はかるし野山青々方眠　光哉
新緑の根元にステッキは倒れ　光哉
新緑の大和は今日も晴れ渡り　青柿
ごつち向いて若葉繁れる谷に立ち　鶴峰
新緑の藤はだらりとゆれてゐる　樹光
新緑のさや豌豆を赤くたき　桃太郎
新緑へ書齋の窓を開け放ち　菊路
新緑の頃にブランコ綱を替へ　公二
思ひきり若葉へ息を吐き捨てる　不然
療養所へさす新緑の日がぬるい　柳月坊
新緑に少しねれてる石だゝみ　不明
新緑へ燕は腹を見せて行き　麗亟
新緑に錦魚の鉢のすきとほり　市公
新緑の朝をガウンのまゝ素足　勝二
新緑へすれ〳〵に行く山の汽車　裸人
新緑に毛蟲の事は忘れ果て　草石
すく〳〵と伸びた我子よ新緑よ　らつば
新緑の郊外赤い屋根も見え　碧水
水盤に絹糸草の夏の色　凉哉
新緑やあゝ春は逝く春は逝く　雨町
新緑へ据風呂の煙白く立ち　紅
新緑にいつそ惱みの募る戀　柳秀
新緑に包まれ藤は年増めき　圓角
新緑の中を地ならし機のひゞき　スエノ
山のみどりへとびこみし夢　たけし
名ばかりの庭へ新緑訪れる　北人
新緑の日本を燕忘れかね　同
戀の思ひ出新緑の寶塚　沒食子
砂ほこりあび新緑のプラタナス　同
新緑にかゞやく山へ手をかざし　紘堂
新緑へ女は藤を目付け出し　同
新緑に少し汗ばむ程の坂　桔梗
新緑へ犬もうれしい連になり　同
(人)新緑を遙に眺めビルディング　艶笑
(人)新緑のほとゝぎす夫のブラシ借り　スエノ
(人)新緑のそよぎまぶしく逢つてゐる　たけし
(地)木の芽ふいごし光ぶいごし　緑之助
(地)新緑の中の櫻の白らけたり　圓角
(天)新緑に溺れさうなる僕の家　巨柿
(軸)川底のみどりへ舟の手ぼし　葭乃

▼同人淺井冷々子君の御令閨は病氣で赤十字病院愛媛支部へ入院されてゐます、一日も早く全快されることを祈ります。

▼本社の客員であつた西原柳雨翁の追悼會が東京の川柳社數社聯合で五月二十五日午後四時から四谷區寺町西念寺で催されました。その他各地の川柳社でも催されてゐます。

▼神戸新聞社の主催で川柳會が五月十八日午後七時神戸仲町通協和會館で催されました。

▼同人朝田新水社友桑原京耶舊同人川合舟々君とが六月十六日山陰から九州方面へ旅行せられます、途中本社の鳥取、鍛川、別府支部へ立ち寄つて下されるそうです。

▼鬼灯川柳社の一周年句會を六月十四日午後七時より大阪東區北久寶寺町善瑞寺で催されました。

▼大阪媛柳川柳會では三味草の一周年句會を六月十五日午後七時より北區天滿宮裏龜の池で催されました。

▼前號に西原柳雨翁の令嗣の居所、久留米市櫛原町とあるのを東京市外高圓寺九六九西原鐵男と訂正致します。

見送り

見送りの羽織の襟に氣をきかしきたりの樣に見送り帽を振り見送りにヤア〳〵と言ふ顔であひ見送りぐらいしたいと思ふたに見送つてから道頓堀を通つて來見送りは自已の存在しめすだけ見送りの一人は自棄酒呑んで見送りの一群は先に來て待ち動き出す窓へ見り送ついてくる初旅を心配をして親は送る避暑する社長を見送る騒ぎ見送りに母だけ行かぬ事にする紙屑となつてテープが手に殘り喜ばぬこの洋行へ母も來る見送りのあとは淋しい波止場見送りの親見送りにもまれてる見送りの中へ連れてきたい一人もう切れたテープへ笑へぬ顔見送りをたいした事に思はぬ身見送りの窓で握つた手の温み見送り昨日と別な顔で來る見送りの道々男うちあける言ひたらぬ樣な氣がして送つる見送りの此處でも萬歲々々トランクの重さ驛まで送り

南牧　笑四　勝二　柳次　憲太　朝陽　柳兒　碧水　紅　登志雄　四方路　艶笑　沒食子　麗亟　市公　紘堂　桔梗　樂之雨　吉祥　今雨　豆秋　正博　綠之助　巨柿

橋本綠雨選

見送りの手に汗ばんだ入場券　吐句坊
見送りは餘りの事に欠伸する　スエノ
眞先きに行く見送りと仲がよし　素峰
見送りの便りを缺かすまい話　湖山
見送りの戻り重たい足になり　菊路
見送りへうるんだ眼を向けただけ　莢一
見送りはまだ萬歲を云ふてゐる　方眠
乾杯をあげて見送り派手に立ち　明果
見送りの一人が振ればみんな振り　光哉
見送つて歸れば部室の亂雜さ　柳月坊
見送りは淋しく消えた奉公先　山月
見送りは座席も取つてくれてゐる　公二
見送つて母は旅先まで案じ　落葉
カーブを越へる迄帽子を振つてる　鶴峯
見送りの嬰兒は知れぬ笑ひなり　紫光
萬歲の聲へ頭を下げた切り　さだを
船体の見えなくなるに立つて居る　暢山
見送りにうつむきがちの許嫁　虚白
見送りの應援團へ誓ふてる　琴夢
洒落一つ殘して汽車の遠ざかり　山茶花
見送りの方から煙草貰ふなり　たけし

佳句

見送りの華々しさへもの足らず　圓角
見送りの眼に構内のうす暗く　たけし
見送りのあとにすてたる卷煙草　英郎

▼前號の四頁、水田光穗君の二句は川柳塔欄に入れるのを間違つたのですから訂正致します。

▼舊同人關本雅幽君の長女五月廿四日長逝されました「哀悼の意を表します

▼道田葉中君の御令閨が五月廿一日可愛い不二ちやんを殘して永眠されました。哀悼の意を表します。

▼私は六月九日夜芦穗、雅幽、山月その他の諸君と曹洞宗總本山永平寺を詣で三國の東尋坊、芦原溫泉、福井市を廻遊して來ました。

▼本社神戸支部では、再び楊井二南君が幹事に復歸して、六月十九日久し振りに梅雨の句會を催した。

▼本號の編輯は路郎先生、ひろし、亂耽、愚陀雨町、山雨樓、かほる、公二、雪峰等の諸君と私とで致しました。

新誌友

（五年六月十五日まで）

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八十錢以上拂込みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますからお

見送つて來て淋し帶を解くあきら　朝田新水　中見光路　共選

方角をかえて酒場へ足をむけ落葉　樂之雨
多勢に矢の方角が物語り樂之雨
敎へられる儘に方角くたびれる　さだを
突當り右へ二丁こ敎へられ紅
方角へ船長なまりの聲を出し明果
緣談に方角先に見て貰ひ涼哉
不時續きその方角に井戸があり不然
方角を氣にして居れば風邪ひき草石
鬼門こかいふ方角を母は指し麓生
方角をいゝ口實に斷られ耕民
方角に合點のゆかぬ驛に立ち吐句坊
おみくじの方角だけは當つてる四三二
峠から見るこ方角に靄があり英郎
あざやかに燕方角かへて飛び紫石
年寄の方角論は頑固なり圓角
想像こハッキリ違ふ磁針なり桔梗
方角の不審へ揉めるキャンピング柳兒
方角を替へても不獵の續くなり同
片足履いて方角敎へに出突文坊
方角を違へトップリ驛で暮れ同
榮轉を發たせ方位が氣にかゝり四方路
方角を云ふ母親口が過ぎ同
涼しげな顏で方角問はれてるらつぱ

見送りの中へ期待の眼の動き不然

方角

○　新水選

方角を子供に聞いて信じきり素峰
方角を云へない二タ間だけの家艶笑
その方角探ねくんで今日も暮れ翠夢
方角を指した立札消えかゝり敏雄
暗號で書く方角の告知板失名
方角を苦にして貸家見當らず枯骨
方角が違ひ櫻を見てかへり たけし
娘の家出まづ方角を見て貰ひ當り矢
東京は此の方かこも母は言ひ樹光
方角を楯に緣談斷はられ暢山
方角を聞いて神棚吊り變へる菊路
煙突を目當に方角敎へられ春市
方角は變れど富士に雲があり憲太
明日の使ひの方角を聞いて寢る今雨
迷へるに方角くどく敎へられ鯉友
丸ビルの所在を汽車で聞いてたき憲太
方角もわからぬ程に長生きを好治
極道の居る方角へ母の夢勝二
方角へ同んなじやうな山ばかり　十三　紘堂
方角の馬鹿に出來ない例を擧げ沒食子
反對の方角非替なしこいひ方眠
東西もわからず女平氣なり豆秋

申込下さい。（綠雨）
福田喜作・朴木葆光園（八木毒仙　越智恒孝、青柳社（三好計加）都藤冷笑、山根香仙、飯野健坊、天野卜居（梅田支部）岡本三木雄・丸矢正一（福田山雨樓）今井喜一郎（中見光路）古谷金志（西村山月）田中英雄（平井司郎）瀧田武藏坊（丸山公二）福田鶴峯（橋本綠雨）原田光男（長崎柳秀）大橋龜雄（廣瀨無鬼）安藤空山、長谷川常、三好正、寺地卓二、藤岡旦洲、和田四三二、辰巳離風、南喜三郎奥六造、松並光哉、久郷凉二、片桐惠、關根五左衛門、山本藤太郎、蛭子ます、阿部佐保爾、伊藤喜一郎（本社事務所）括孤內は紹介者

轉居

▲出口雨町君は大阪市東區東雲町二丁目一七三へ

▲森石竹君は大阪市港區八幡通三ノ一、一、七青木淺治郎方へ

▲須山重陽子君は神戸市東須磨戸政町二ノ八七へ各移轉されました。

改號

田中正坊君は紫溟、二宮逢人川君は南牧と改號されました。

方角に小僧いゝかげんなこと言ひ　同
絶頂へ來て方角決めて下り　四五磨
方角を後振り返る潮干狩　同
名勝を中心にして敎へられ　裸人
方角が變つてしまふ新開地　同
夜の火事此の方角は何處になる　且洲
場所もよし買ふ氣の老舗方もよし　同
方角がわからなくなる裏通り　碧水
方角を知らせる指へ顏をよせ　同
天に星あり方角を誤らず　綠之助
霧を突いて〳〵羅針盤　同
方角を聞くのに餘り少さい子　規堂
方角を聞けばごもりは指でさし　同
君ゐます方へおごそかに朝　吉祥
圓形して軍用鳩飛び去りぬ　同
方角を違へたらしい村もなし　憲坊
方角をかへて今年は海に行き　同
高慢な顏へ磁石が靜止する　市公
病み扱いて寢る方角(氣づかはれ)　同
方角を換へて行商よく當り　朝陽
方角を地藏の前で迷つて居　同
金神が何のと父の頑固なり　桂枝
方角もわからぬ程に醉ひつぶれ　同

佳句

よく續く不運方角にも惱み　柳兒
方角へ理想の家の見付からず　英賀夫
方角へ二人掛りで地圖擴げ　山月
雪深し方角さへも見失ひ　方眠
あやまつた方角石をけつて見る　柳月坊
方角を聞けば少うし伸び上り　綠之助
露臺から見る方角の違ひすぎ　碧水
易に出た方角水の上を指し　市公
方角を聞いて二人の飯がすみ　光哉
(軸)淋しさは方角(さへ)も知らず居る　新水

○光路選

方角を子供に聞いた旅の空　山月
東西もわからず女平氣なり　豆秋
方角を敎えてやつた土工の目　らつぱ
嫁遲れ方位なんぞをもう云はず　鯉友
方角も立たず銀座を通りぬけ　紫石
方角の引合に出る煙草店　蚊郎
方角も分らぬ程に花に醉ひ　桃太郎
兎も角も皆んなこちらへ行く(ぬき)　落葉
金があり閑があり方位氣にかゝり　艶笑
宿の朝解せない方に陽を拜み　柳兒
方角が惡いと醫者を變へさゝれ　沒食子
方角も言はず大阪へ來たら寄れ　英賀夫
ビルデングでれば方角取りち(がひ)　英郎
方角の違つた方から嫁の來る　吉祥
借金に方もかわまず越して行く　紅
方角を聞けば圓タク寄つて來る　規堂
方角を苦にして貸家見當らず　枯骨

方角のこと母一人氣にかゝり　湖山
漂流の瓶に遭難場所が知れ　暢山
間違へた方角五丁ばかり損　吉紘堂
方角もあてにはならず沒落し　翠夢
方角は兎も角やつと捜しあて　桔梗
明日の使ひの方角を聞いて寢る　今雨
十姉妹逃げて方角ふと迷ひ　憲太
方角をいゝ口實に斷られ　耕民
また違ふ方向板の電車が來　吐句坊
一足づゝに南がかはる山の道　勝二
西東覺えた頃に親の無く一水
榮轉を發たせ方位が氣にかゝり　四方路
方角が違ひ櫻を見て返り　たけし
方角を違へトップリ驛で暮れ　突支坊
方角もきめず新綠たゝへゆく　圓角
方角をきけば少うし伸び上り　綠之助
恩人の住む方角を枕にし　樂之雨
この邊の方角にして遙拜し　碧水
甲板で故鄕の空を敎へられ　朝陽
月影の方へ方へと二人連れ　同
盛場の方の電車に吸ひ込まれ　市公
地圖で見た方角へ來て突當り　同
又もこの道へ方角取りちがへ　不然
轉宅に母方角を固執する　同

佳句

神棚をつるに方角ちと困り　憲坊
病みついてから方角が氣にかゝり　あきら
方角が聞いて出前の少しさめ　裸人
方角をアッチ〳〵と迷ひ子　四五磨
ふと氣付き病床の向き換へて見る　桂枝
方角のまだ呑みこめぬ廣い街　光哉

三　光

北枕うつかり敷いて叱られる　菊路
方角もわからぬまゝに兒がつゞき　スエノ
くもはひがしに煙はにしに　たけし
（拙吟）艮になにがあるさら懷ろ手　光路

社告

最近「近作柳樽」の投句が非常に激增したので、これを一部と二部に分ち、一部は主幹が從來より以上の嚴選をされ、二部は安井ひろし氏が選される事になりました。御投句の方は一部か二部のごちらか一つを選び「近作柳樽一部」又は「近作柳樽二部」と明記して御送稿下さい。

近作柳樽一部（十句以内）　麻生路郎選
近作柳樽二部（十五句以内）　安井ひろし選

カナメ喫茶店

心プラにお出での節は是非お立寄を
緊縮時代に最も適合した
カナメ喫茶店へ
柳人は特に歡迎いたします。

南區疊屋町周防町東入南側
カナメ喫茶店
柳人
永田里十九經營

旅のこゝろ

―裏日本から函館へ―

麻生路郎

旅は私にとつて詩であり夢である。

○

五月十五日の午後二時までは、二階に駈け上つて浮腰で、ある新聞社への原稿を書いてゐた。原稿を書きながらも留守中の指圖をしてゐた。旅裝をいそいでゐた。お湯に飛び込んだ。出がけに來た郵便物はすべてポケットに捩じ込んだ。その中には信子さんの第二句集もあつた。南海電車の車中で「川柳雜誌」への簡單な紹介を書いた。

自動車が三越へ飛んだ。三時四十分には青森行の急行列車の中に私自身を發見した。私の詩は、私の夢はここからはじまる。

○

私の前に婦人の黑い影がさした。しかし私は顏もあげなかつた。一人旅といふ氣易さに、靴でも脫がうと思つてゐたからである。

その黑い影が私に呼びかけた。

私が顏をあげると、そこには壽枝女さんが少しく腰をかゞめて會釋をしてゐられた。

『やあ』

と云つて私も席から腰をうかして思ひがけない見送りに感謝の波動を送つた。

『琴人がお見送りしなければならないのですが――何分忙しいものですから』

と、壽枝女さんは、これだけのことをものやさしくきれゞ〳〵に云はれた。

『なあに、仕事があるんだから、見送りなんかしなくてもいゝんですよ。僕は皆の仕事の邪魔をするのはいやだからいよ〳〵立つといふ時間を誰にも知らせなかつたのです。』

『それからこれを渡して呉れこのことでした』

こ云つて壽枝女さんは小さな包みを私の手に渡さうこされたが私が躊躇してゐるので

『あの……先生のお名刺なのです。若しか足りないこいけないこ思ひまして』

私は琴人君夫妻の行き屆いた好意をつくづくうれしく思つた。

軈て發車の時間が來た。壽枝女さんは車窓に立たれた。私は窓から首を出した二人こも無言である。

私は昨年の十一月に琴人君こ二人で船の旅に出たここ、その夜は寒い晩であつたここ、その時壽枝女さんは肩掛をふき飛ばすやうな棧橋の風の中で、船か岸を離れて見えなくなるまで佇んでゐられたここなどを思ひ浮べてゐた。

車掌の汽笛が鳴つた。多くの喜びこ悲しみを乘せて汽車は徐々こ進行をはじめた。車窓に寄り添うて居られた壽枝女さんは少しく身をひいて、私の方へアデューをされた。汽車の進行につれて、壽枝女さんは手をあげながら私この距離をせばめるために、小走に走りながら追ひかけながら、遙かに彼女の微笑を投げ與へられたのであつた。

斯うしたここが戀人同志で行はれたこすればあまりにも月並な、あまりにもローマンテイックな情景であるこ云はねばならないが、このコスモスのやうな物やはらかな壽枝女さんがさうした行動を大膽に自由にやつて下さつた美しい心の響きに感激さゝれたのである。私はいつの間にやら、家に殘した多產地獄の妻のここを考へてゐた。

○

汽車はひた走りに走つてゐる。

私はポケットから『蒼空』（信子 第二句集）を出して讀み耽つた。

京都から三十四五の婦人が同車して私の横に腰を下した。

『蒼空』は彦根へつくまでに讀んでしまつた。もう一度讀み返す時の參考に、こころ〳〵へ鉛筆でチェックをしたり寸言を書き加えた。

彦根をすぎてから簡單に夕食をした。雨町君からもらつたジョニウオーカーを鞄からこり出した。

逃げて來たやうにも見える一人旅

○

金澤へついたのは夜の十時三十五分だつた。プラットフォームへ眼をやつた。若しか久流美君が出てゐてくれたらこ思つたからである。しかし、それらしい影も見えない。プラットホーム 廊 は死んだやうに寂しい。降りる人も乘る人もあまりないらしい。眞夜中の感じだ。大阪こ同じやうなここを考へてゐた自分を嗤つた。諦めて再び横になつた。

○

三條あたりで顔を洗ふ。汽車の中で顔を洗ふ事には、ある面倒くささこ愉快さこの二つの交錯した感情を私は持つてゐ

るのだ。喉でもさうかも知れない。尤も家にゐても顔を洗つたことのない人は別だが。

東三條のあたりで食堂へ出かけた。北國の風物が車窓に迫つて旅のほがらかさに浸る。晩秋のころに稻架に用ゐる並木のすく〳〵立つてゐるのも北國風景の一つであらう。

裏口本酒よほのほになつてくれ

私の横にゐた女は新津で新潟行に乘換えてしまつた。新發田へ着くまでに二回目の檢札があつた。

今度は一々、ひとり〳〵にその行先に着する時間を報告して呉れる。

『青森は今日の四時二十五分につきます』『夜の十時に函館につきます』『あすの朝七時二十三分に札幌につきます』といふ具合だ。

旅人にとつて檢札ぐらい興味を殺ぐものはないが、斯うした親切な取扱ひは一つの旅の慰めででもある。

第二回海峡親善川柳大會（函館）

村上を出てからは岩だらけの海岸だ。小丘には山つつじが點綴して少女に頰紅をしたかたちだ。小さなトンネルを抜ける。又岩だらけの海岸である。

天氣はいゝし、沖は風いでゐる。漁船が靜に流れてゐる。海岸の家々はいづれも板屋根じ屋根の上には漬物石を小さくしたやうな、丸みのある小石が一面にならべられてある。それは豆板を大きくしたやうな感じだ。それ等の板屋根の中で藁葺が一寸威張つてゐる。瓦屋根は極だ道を行く人も田や畑に働いてゐる人々も一樣に火消のやうな風姿をして火消が冠つてゐるやうな頭巾をかぶつてゐる。風がひどいのだなアと思はせられる。

○

新聞の廣告欄をのぞく。

主婦の友の廣告記事中に、谷孫六さんの千圓貯金が載つてゐる。いづれ何んとかして何とかしたら千圓たまるのだらうが、その何を何んとかするのが面倒くさ

い自分なんかには全く縁のないことだと思つた。

私も孫六さんの岡辰は講談倶樂部で千裂れ〳〵に面白く讀んだ一人ではあるがお金を儲けやうなんて心得違ひなことを考へて讀んだことは一度だつてなかつた私に言はせると、婦人雜誌によくある何圓の收入で月々何圓を貯金をしてゐるとかいふやうな記事や岡辰押切帳のやうな讀物を貯金小說と呼んでゐるので、あれは面白くさへあればいゝのだと思つてゐる。尤も婦人雜誌の記事と孫六さんの岡辰とを一緒にしては孫六さんに叱られるかも知れぬと思ひながら新聞を投げ出してしまつた。

○

驛長さんか、助役さんの家族らしい一群が、酒田から乘込んだ。轉任らしい。一昨年は金澤から弘前へ轉任する陸軍將校の多數の家族と同車したが。今度の轉任も相當に家族をもつてゐる。夫婦に、長女、次女、三女、長男、次男、長女の長男？の八人連だ。東海道線ではこんな轉任にあまりぶつつからないが裏日本では、ずゝに目立つのかも知れない。

○

秋田を過ぎてから、乘客專務が這入つて來て、

『エ、時の宣傳でございます。只今十二時九分半でございます。時計を合はしていたゞきます』

と云ひながら次の客車へ消えて行つた。

これはいゝ思ひつきである。實際的でもあり旅のつれ〴〵をなぐさめてもくれる。

轉任の一家族は大館で下車した。

○

汽車が陣場へ着た。車外に出て歩く。すぐ横で、福井から乘つたといふ四十過ぎの男が、乘客專務と立話をしてゐる。

『札幌に行くのに急行券がききますか？』

『鐵砲彈と一緒で一回ぎりです』

『ハハン、二圓五十錢したんだが…』

『一萬圓出しても一回ぎりです』

こんな、のんきな會話をしてゐる。これで靑切符なんだからをかしなものさ。

『八百　粁　以上あるのかな』

『八百一　粁　あります。哩にして五百哩からあります』

こまだ二圓五十錢の問題と離れない。今度は乘客專務が僕の方へ話しかけて來た。

『それから、この山のところに、風穴があります。倉のやうにして、夏なゝは冷藏の代りにしてゐます。岩や地を掘ると冷めたい風が吹いて來るのです。この山を越すとすぐ靑森縣ですが　靑森縣に這入るとありません。これは秋田縣に限る樣です。この向ふの山のところへ馬車で行くとひかけ温泉といふのがありますが、これは皮膚病にとてもよく利くのです』と話續けてゐるうちに發車時間

になつたので、自分の席に戻つた。陣場二時四十四分發。弘前を出るとすぐ急行券をあつめに來た。

○

『あと七分で青森でございます。どなた様もお乘換でございます。聯絡船は五時半でございます。船名は翔鳳丸でございます。お忘れもののないやうに』

こんな、ございますづくしを聞かされながら、ほつ〳〵靴をはく。

空氣枕の空氣が拔けりや青森さ

青森へ這入ると、桃や櫻が一時に咲き亂れてゐる。今年は春を二度する譯だ。

それにつけても、思ひ出すのはモラトリアムのあつた年の春をしなかつたことだ。私が病院を出た時には、すでに新しい麥稈帽が街を歩いてゐたから。

○

汽車が青森驛に這入ると、

『アチモリチヤクノセツザツシチテニモツテクレカメ井六』

といふ電文が頭にうかぶ。車窓から首をつき出して『川柳雜誌』を手にしてゐた。犯人と逆の心裡で早く捉へられるべわけなく『みちのく』の小林不浪人君に捕まつた。

二人は待合室まで行つて初對面の挨拶を交はした。こゝで暫く話してから聯絡船に移る。

天氣はいゝし、浪は穩かだ。二人は右舷で話しつゞける。市街の上方に展開してゐる連嶺には雪をいただいてゐる。

名を聞けば八甲田山だ

このことに、自分は不浪人君と語りながらも少年時代に錦影繪で見て同情の涙を流した雪中行軍の遭難事件を懷ひ浮べた。

私の少年時代には船場の御靈神社の境内に日本一が二つあると云はれてゐた。一つは御靈文樂座一つは錦影繪であつた。

川柳小唄振り　（寫眞は川上氏作供子は風の子）

く證據物件を手にしてゐるのであるから

の人形淨瑠璃、

附近の繁華を擔うて立つてゐた文樂座は火災に罹つたため元のところに建たなかつた。錦影繪はそれもずつと早くほろびてしまつたが、私の少年時代にとつては今日の少年のキネマでもあつたのだ。

單に影繪であれば黑一色であるが、この錦影繪といふのは色彩があつたし、手足を動かす仕掛になつてゐたし、それに辯士が畫面中の人物を陰で動かしながら滑稽味たつぷりな口上を云つたものだ。從つて落語などにある滑稽物を主として加えるのを忘れなかつた。

あつかつてゐたが、時事物を一つ位づゝ

八甲田山の雪中行軍遭難事件が錦影繪の呼物となり、私たち少年の小さな頭を搔き亂したことは非常なもので、今でも私は、はつきりと印象づけられてゐるのである。私が夢みるやうに八甲田山の雪に吸ひつけられてゐたのも故のないことではないのだ。

不浪人君の話では錦浪（谷孫六）三太郎の兩君は明日來て、明晩は經濟協會の講演會に出演し、十八日の朝の船で函館へ行くことになつてゐるとのことであつた。で、今夜は私の家へ泊つてはと切にすゝめられたが、行くところまで行かねば落ちつかぬので好意を謝して海を渡ることにした。

○

食堂に入る。

六つ位の男の子を連れた婦人が同じ食卓についた。女は醜くないほどにてつぷりと肥つてゐた。三十二三らしい。船に醉つたと云つて額に手を觸れてゐた。

ぽつ〳〵と談しかけて來る。函館に來て一年ほどになるとか、病人の介抱のために彦根まで行つたが、亡くなつたのでがつかりしたとか、京都の話、阪神住吉などの話が出た生田蝶介さんについて歌を暫くやつたことがあるが、近ごろはその方も止めてゐるやうな話まで出た。それから、函館で、お宿がきまつてゐないのでしたら湯の川の福井館へゐらつしやい箱も這らず靜かでいゝ家ですと親切に敎へても呉れた。

食慾がしきりにすゝんだ。私は船にゐて船を忘れるほど元氣が出て來た。

○

一人のこらずが水に醉ふた錦魚のやうに横はつてゐる。僕は自慢してもいゝほど元氣だ。勿論船は頻りに動搖してゐるがあたりの子どもを集めて玩具の消防自動車を走らせて遊ぶ。こどもは僕よりもつと元氣だ。殊に男の子は無邪氣だ。平氣で遊んでゐる。從つてこの叔父さんがその子どもたちの中で人氣を博したことは云ふまでもない。

○

間もなく夜の十時だ。

翔鳳丸は船腹を除々と棧橋に横づけにしつゝある。上甲板で着船を待つてゐると、指呼の間に、函館山が海上に黑く浮び、金砂子を撒いたやうに燈火の明滅する市街が、その左方へ展開して旅愁をそそる。棧橋では船客を迎へる人たちが黑き一團をなしてゐる。その中から花童子君と僕との視線が一早く合致した。双方から手を擧げて目禮を交換した。

船腹がぴつたりと横づけになると小さ

なブリッヂがかけられた。いそいでそこを流れ出た。花童子君の外に喜多坊君と桂花君とが出迎えてくださつた。何れも相識の方ばかりだつた。

一旦待合室へ這入つた。

『お茶はどうだね、ビールは？』

と花童子君が一人で引きうけてくれる。

『葭乃さんに電報をするか。今からでも迷惑ではないかね。』

と例によつて何處までも行きとどく。

喜多坊、桂花の兩君としばらく談し合つてから自動車で龜井邸に入つた。

奥さんにも母堂にも久濶を叙し、直ちに二階へ通された。そこにはもうベットが私を待つてゐた。十二時まで次から次へと話が、はずんだ。三休君の令息が學校を出たので歸宅したこと、川柳小唄振りを拵えたこと、等々々。

私の句では『夕櫻ぢんぼがへりがしてみたし』を作曲振附けをしたと聞かされる。思はざるの愉快さである。

函館毎日の夕刊には私の着時間が報ぜられてゐた。社の杳三君からは

ゴリョコウノゴアンゼンチイノル

といふ電報が屆いてゐたのもうれしくさせられた。旅は歡喜である。

十二時すぎに床に入つたが、昂奮狀態で一時を聞いても眠れなかつた。私の體軀を引きのばしたら腰がめきく〳〵と云ひさうだ。相當に元氣でも矢張り疲れたんだなアと思ふ。

氣候は想像したよりも温かだつたが、それでも冷るとはかなり冷えた。大阪あたりの三月頃の氣候だと思へば間違ひはあるまい。冬シャツに浴衣と丹前の襲着で寢た。（續く）

粒々集

○

東京　富士野鞍馬

貰ひ物時計を二つ並べとき
うつり氣の又燐票を集める氣
大股に歩るくとネルがほの見えて
退け時のストッキングに皺がより
御機嫌の社長の松の綠なり

○

御影　長崎柳秀

治らないものに粉藥水藥
何處からぐう運んだのか城の石
新夫婦人の手前のあらばこそ
下女のすることなど眞似て肚を立て
隔りををいて歩めど新夫婦
雨も風もしのけて親子水入らず
歸れとは又初まつた三本目
禁酒する話しは鼻にあしらはれ
失業か赤か知らねど髪長し
豪博士結局香具師にしてやられ
若い妓を伴れてマスクに襟を立て
高校へはいつただけで病み續け
鯉幟のたくり返る風が吹き

○

渡島　神尾三休

キャンピングからの懇意へ子を連れる
百坪の地主となつた足の跡
梅雨の窓欠伸がうつるので笑ひ

欣女死後

安井ひろし

二月の末に欣女が永眠してからもう百餘日になる。其後句作も怠り勝ちであるため、僕の川柳生活に欣女が如何に影響して居たかといふ事をいまさら思はせられます。

欣女はよきベターハーフであつて殊に川柳については僕を鞭うつて居た事を痛切に感じて居ます。

欣女死後にいろ〳〵の問題が起きた。僕の勤め先にも變化があつて、深刻な不景氣の影響はのんきな僕をも餓死線上にほり出してしまつた。現今ではその日の電車賃にも困る狀態にをるのです。

然し僕は精神的にはそんなに悲觀もして居ない。僕の机の前で欣女の寫眞がいつも僕を戒め、勵まし、常にほゝえみを與へて居てくれます。

僕は生前の欣女よりも永眠した欣女によつてよの深く彼を愛して居た事をしみ〴〵感じます。

最近葉平君の夫人が愛兒を殘して逝かれた事をきゝ、僕は慰めの言葉もなく、たゞ葉平君の御心中をお察しして居るのみです。妻をなくしたものにのみわかる悲しみだと思ふのです。

僕も今月號には句を發表する事とした涙ぐましいばかりの柳友諸兄の御同情と御鞭韃は僕をして失業苦を忘れしめ再び新生涯への活躍に光を與へてくれるからです。（昭和五・六・一四）

街に住めば（二）

高橋かほる

つめを磨いたりうがひをさしたりするのは知つてゐますが、偶然にはいつた床屋でコーヒを出してくれました……ほんとに好い氣分になりました……

『だれです、酒やつたらよけ好い氣分になつたやろと云ふのは……』

三十三歳

福田山雨樓

僕は今年三十三歳である。厄年だ。萬

事控え目に、無事安穏に今年を送りたいと思つてゐる。

三十三歳(みそさざい)と云ふ鳥がある俳句では冬の季題の中にちやんと載つてゐる。燕雀類に屬し、聲美しく、巣を構ふるに巧ださうである。この鳥を詠つた俳句に自分はいつしか眼をうばはれてゐた。何にでも三十三歳と書いてあるとすぐ眼につく。

ところがかなり驚くべきものを見付けた。五、五、二五の大阪朝日新聞は世界的名作『西部戰線異狀なし』の作者レマルケの新作發表權獲得を報じてゐる。その中に鬼才兒レマルケその人は今年三十三歳だ、とある。

自分はぢつとしてゐられなかつた。

無題録

松丘町二

――時が解決する、とは聞かされてゐるが解決した鐘の音をきいたことがない半文錢――

時に問ふ。『君の力によつて藝術家の眞價を解決し決定せることありや』時即座に答へて云ふ。『餘りにも多し。敢て例を海外に求むるまでもなし、試みに坐右よりその二三を擧げんか。平賀元義然り。寫樂然り。蕪村然り。啄木亦然り』

○

左顧右眄、人の顏色を見廻しながら恐る〳〵ものを云ふ。珍らしく齒切れがいゝと思ふと覆面の蔭からの捨臺詞だ。何故もつと正面切つて堂々とものを云ひ得ないのか。よしどんなに幼稚で間違つたことにせよ、死に身になつてズバズバ云ひ切る言葉には何等かの暗示性と迫心力がある。この點左翼の人々は氣持がい〳〵

○

飴ン坊氏、番傘の漫評に答へて縷々辯明して曰く『恐らく私への呼びかけと見せてその實川柳雜誌あたりへ當つた言葉であらう』これを掲載したきやり、編輯後記に辯明して曰く『かうした論議が柳壇的に何程の効果があるか全く一つの試みに過ぎない』

番傘の漫評實に悔りがたし、と私は苦笑した。

乞食

小島素心

袂に五十錢銀貨と一錢銅貨とが一枚宛殘つて居た。道頓堀で盲の乞食に、その銅貨を與へた。乞食は幾度も々々大地に頭をすりつけて禮を述べた。一錢であんなに禮を云はなければならぬ乞食の勞力も容易でないと思ひ乍ら歩いて、私は港町から市電に乘つた。切符を買はうと思つて袂を探つて殘りの五十錢銀貨をつまみ出して見ると、五十錢であるべきそれは一錢銅貨である。先刻辻潤間違へて乞食に五十錢をやつて了つたのである。大變なことをして了つたと思つた。とにかく一錢では電車に乘せて呉れないからそのまゝ降りて仕方なしに京町堀の私達の倶樂部迄歩くことにした。辻潤者。その

不注意の罰に歩かねばならぬのか。私はつまらなくぶらく歩き乍ら思つた。然し――乞食には何故一錢銅貨のみやらねばならぬだらうか。五十錢惠むだ爲に電車に乗れずに歩かねばならぬことを何故辛く思ふのだらうか。そうしたことを仕出かしたことを何故迂闊な事と思ふのであらうか、私はさう思ひついて、先刻乞食が幾度も大地に頭をすりつけて禮を述べてゐた樣を思ひ浮べた。盲の乞食に私の心は判らなかつたであらう。私の姿は見得なかつたであらう。然し掌に投げ與へられた貨幣が銀貨であることだけは判つたのであらう。麗かな春の街にふさはしい元氣な歩行に變つて私は倶樂部に行き着いた。――五・二・二一――

アベエニユーより

森石竹

あなた下手よ
横合から彼女に取られた金魚すくひ
目高のやうな可愛いのを二匹
たつた二匹かい
と云ひつゝ罐を持たされてゆく
色男を人目がひく

川柳獨語

平井蒼太

若し許される處の言葉であるとしたならば、私は『主情派』なる傘下に集まる一個の泣き男に過ぎない。でも、珈琲店女給のある形態を唄ひ、世の人妻のある姿を描き、人々のある風姿を描き出すと云ふ、多少の感懷以外の何ものでもない川柳よりは、まだ私自身の川柳であると云ふ懐しさがある。

○

詩はリズムではなからうか。脈々たる詩情の波の一つ一つが、恰も渚に波紋の跡を殖すやうに、夫れは飽くまでも心のまゝに生れ出で刻まれる處のものなのだ。リズムとは川柳的五七五調の疊み込まれた調べを云ふものではない筈だ。もつと根本的な奥深い處にこそ知る可きであらう。

○

新興短歌と云ひ前衛短歌と云ひ、傳統の歌調を破壞することに依り、新しきプロレタリアートの短歌としての形式建設へと、今生みの苦しみを味はつてゐるのではあるまいか。では彼等は川柳の存在を失念してゐるのか。川柳こそはプロレタリアートの言葉を詩化せしむるには、最上の適切な詩形ではないか。

正しき意味に於ける民衆詩川柳よ。全プロレタリアートの支持に待つて、其生命の永遠にあることを。

○

主情派とも見ゆる小六氏よ、あなたの名を見ないこと久しい。六の十號柳樽に『あみ物を半分にして死にました』『美しい話で笑ひくねる』の二句以來、私はあなたの名を待つこと又久しい。有餘

る詩心を抱いて、次々に名を消して行かれる川柳作家の、何んと數多いことであらう。川柳すらも捨てる心境は、最早生命の光澤を消失されたことではあるまいか。再起こそ。

○

一夜に數十の川柳製作を爲遂げた話。百の川柳を製作すれば、其内には必ず良き作品一つを得ると云ふ話。なぜを私は屢耳にするのであるが、斯くては川柳も多量製産を期する商品と同樣であり川柳作家も商品製作機械と同一に看做すことではないか。飽く迄も藝術は絶對的のものであり、而も尊貴にさえ取扱はれねばならない。決して多作を誇ることが、或は良き作品を得る可能の割合を信ずるが如き、安價なものであつてはならないのだ。（六・三日）

瞑想

尾崎海洋人

人が燒かれた。

油がトロ〳〵と錆着いた鐵管を傳つて滴り落ちてゐる。……そして……

美しい女がソツトそれを掌にうけて舐めて居た。

三題

出口雨町

極めて悠長なテンポで自然を賛美した學校唱歌は子供の魅力ではなくなつた。職人は自轉車で走りながら『東京行進曲』を唄ふし、旅館の女中は『てなもんやないかないか道頓堀よ』で朝の拭掃除を伴奏する。これらの所謂俗歌は人間の勞作とぴつたりリズムが合つてゐる。故に實によき勞働の伴奏だ。だから音樂は、藝術は、斷然民衆の生活に役立つものでなければならぬ。或ひはもつと貴族的な音樂もあらう。より藝術的な藝術もあらう。だが私は人間の現實生活と没交渉な藝術に價値を認めることは出來ない。まことに藝術は民衆のパンである。

◇

お廻りさんの制帽とズボンが一つの例外もつくらず白くなつた。カン〳〵帽をかぶつて歩く男をあながち慌て者と決めることも出來ない六月一日だ。頭に菖蒲を卷いて走つて行く出前持。市當局に對する憎惡を抱きつゝ、汚ない道路を踏んで行くシーク・ガール。不景氣の中にも多くの客を滿載してガタついてゐる乘合バス。――そのバスのはげしい動搖の度毎に彼は隣席の田舍娘から汗ばんだ快感をぬすんだ。

◇

『しかし今何を上映してゐるんでしようか』と彼は獨りごちた。『何でもいゝわ這入りませうよ』と彼女は答へた。そこで二人は肩を並べて松竹座に這入つた。勿論彼と彼女にとつても、アメリカ映畫は女給の媚態か紅茶一杯の價値でしかなかつた。たゞほんの道頓堀散策のついでにねエ――それから數日後――二人はS館でイデオロギー映畫を觀た。例にもれ

ず、彼と彼女もプロレタリヤの勝利を願ふ拍手を送つて退場した。そして例にもれず夕刊を買つて三錢のツリを忘れはしなかつた。（五・六・三）

憂鬱

辰巳籬楓

現在のプロレタリヤにブルジョアの金を握らせたら、現在のブルジョアの生活を營むであらう。

○

金を使ふことを水を使ふやうに云ふ男毎日きざみ煙草を吸つて若さを送つて居る。

○

妙齡の婦人が秋波を送つて來ても、石の地蔵さんは色目をつかはないでせう。

○

結婚をするからだが丈夫になる、と或る女が或る老婆に云つて居た。

○

娘十七八よく男性をみ倒すと、男二十二三、よく女性をみ倒すと云ふべきか。

○

麥が刈られて、螢が出る。せめてだに螢狩する君のあれかし。

○

だしに使ふて、だしに使はれて常人は他界するのであるか。

○

えげつない、を若しも愛人が使つたらその愛人がいやになる、程えげつない、と云ふ言葉は、えげつない言葉である。（五・五・三一）

五月幟

伊藤緣之助

僕は端午の幟を見てゐる。

それはあくごい武者繪——一顧に値せぬ繪に相違なかつた。

だが、然しである。

古人がすべてを忘れて（古人とは階級闘爭とかイデオロギーとかいふ言葉のなかつた時代の人の謂である。）この繪のやうな武者をみてゐた氣持——見てゐる中に興味が湧いて來た。

金魚のやうな敦盛の眼や、阿呆のやうな眞實の口許——實際こんな顏の人達であつたかも知れないなぞと思ふと、その輕妙ユーモアスは遂に爆笑を強ふるに至る。

然り而してあくごいい鎧の緋も、跳ねてゐる馬の土色も、何と親しみを呼ぶ色となつて浮いて來たことか。（勿論洋畫から見たら、全然無價値な繪だらうし、日本畫から見てもこれは畫だと言ひ切るには畫家と稱せらるゝ種類の人だつたら躊躇するに違ひない）

そこで川柳だ。古川柳に接する氣持と同じやうだ。この繪を見てゐると——。

だが、然しである。

如何に捨てがたき興趣ありといへども、こんな畫を一九三〇年のものとして見せられてはたまらぬ。

そこで川柳だ。如何に古川柳にいゝも

のがあらうと。尙この境地を守らねばならぬとしたら、線乞助は一體何うすればいゝだらうか。

川柳特効藥

田中紫浪

淋しい療養所に居る私達は川柳と言ふ良藥に依つて意義ある療養生活をして居る。

熱が出た時には此の良藥川柳を呑み、胸の苦しい時にも又川柳を呑む。即ち作句することに依つて胸痛が去り熱が下つて了ふ。

私等に取つては實に有難い良藥である大いに感謝せねばならぬ

現在社會のあらゆる新聞廣告に結核患者に取つては唯一の特効藥○○だの、ヤレ肺病には××藥が一番良く効くだのと實にデマゴークな宣傳ぶりである。

私は醫者ではないが私が結核にかゝつてから現在までの體驗上、否又、先輩療友即ち全快者の體驗上肺病は藥に依つては絶體全治するものではない。それは自己の精神である。

此處において私達は川柳を叫ぶのです苦しい時には前にも述べた通り作句する又一咯血するのではないかしら』と不安の起つた時にも此の良藥川柳を呑むのである。隨つて病魔も負けてどこかへ去つて了ふのである。川柳は私達病む者に取つては一に最大の特効藥である。あゝ私達は何故もつと早く此の川柳を知らなかつたのか。（一九三〇・五・一〇）

月刊柳誌 たまむし

發行所 大阪市東淀川區中津濱通一丁目

川柳たまむし吟社

大谷五花村主宰

東北川柳

發行所 福島縣白河町番土小路

東北川柳會

暑中見舞の廣告を募る…

奮つて申込まれたし

雜誌の上で句や文章を見て、風交を深めたいと思つても肝腎の住所氏名が分らない爲めに、文通さへも出來ないといふ憾みがあるので、川柳家各位の住所氏名を一度に知る便宜はないであらうかとの讀者諸彦の御希望に依り、從來新年と暑中に柳友各位の名刺廣告を載せて來ました。本年も左の便法を設けて廣告を掲載することにしましたどうか奮つて御申込を願ひます。一人でも多く掲載することがこの趣旨にもそふ譯ですから、特に貴下の御賛同を切望いたします。

◇一口 金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます。

◇申込期限 七月十日迄（八月號に掲載）

大阪市住吉區杭全町六〇三

事務所 川柳雜誌社

電話天王寺一一六七番

振替大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替御利用の上前金に願ひます（三錢以下の切手代用でも差支へありません）

各地柳壇

本社六月例會

於端の坊

六月六日

露に濡れし庭の樹の葉がくれに、星二ツ三ツまたゝき吹き入る風も徐ろに、作句に相應しき夜に催した、先づ互選「マネキン」を山雨樓氏の披講に依て拍手裡に始むる頃より參會者尚續々あり、やがて定刻に至り席題「ポート」東洋鬼氏選「迷信」山雨樓氏選を緊張裡に發表、次で急霰の如き拍手に迎へられて主幹は兼題を披講された後、二句に渉る海峽川柳大會に趣かれたユーモアたっぷりの旅行談を述らるゝや、彼方此方に爆笑相起り誠に和かな氣分に浸ることが出來た、最後に町二氏選の「朝顔」紫明氏選の「單衣」の發表があつて盛會裡に散會した。因に當夜の出席者は左記の方々で、ひとりひろし氏が差し支へで見えなかつた事は淋しかつた（公二記）

（參會者）路郎先生、琴人、きまた、綠雨、町二、豆秋、四五磨、露斗、村樂、雨町、公二、沐天、繁坊、双車、豆佛、憲太、黑天子、明佳、愚圖坊、山月、山雨樓、夕鐘、里十九、武藏坊、靈壺、靖弘、愚陀、狂雨、苦香瓏、英郎、紫明、源坊、野人、內匠守、貴山、葉平、東洋、鬼、孤舟、春郎、さだを、麓生、かほる、黃蛾、且洲、久郎、亂耽、雅美

兼題　果　物　路　郎　選

デリカシーの指に果實の肌白う　一水
お爺さんにパイナップルをすゝめて　四五磨
半端だけまけても吳れる果物屋　久郎
アップルのストロベリのと名を覺ゑ　雨町
小包をとけば鳴門の夏みかん　夕鐘
病院へ兎も角林檎買つて行く　武藏坊
果物も高い間は見て通り　繁坊
一山のみかん駄賃に吳れるなり　さだを
瞳、瞳、瞳、うす紫の葡萄なり　東洋鬼
果物屋鏡へ人の顔が見へ　憲太
資本家の喰ふ果物は汁になり　亂耽
紙袋着せて果樹園今日も暮れ　且洲
惜しそうに〳〵果物屋は選らし　双車

バナナ屋が埃にまみれ阿倍野　野人
道頓堀果物屋だけ起きてゐる　豆秋
果物も只病床を飾るのみ　公二
苺一ツにエプロンを汚すなり　豆佛
さくらんぼ戀を聞きつゝ喰はれゆく　孤舟
果物をむく役になる年がしら　山雨樓
果物をやりや江戸ッ子で禮を云ひ　かほる
レーシは赤し今日も社長のお留守也　苦香瓏
無花果をきたのうに喰ふ男の子　露斗
果物と戀と無言の雨が降る　麥郎
果物の丸味心を和げん　貴山
夏は匂ひに水密桃の滴りに　町二
果物を皮ごと嚙るふるさとだ　同
へゞレケのポケツに林檎密んでゐ　明佳
盛り枇杷へ窮屈さっに子が坐り　同
果物屋椽の下から紙を出し　源坊
果物屋したゝるやうに夏が來る　同
果物はしなびたまゝの水ぐすり　紫明
フルーツへビールの泡のふくれよう　同
果物が形をかへた涼り膳　黃蛾
果物へ色電球のいる夏よ　同
果物がすきであつたに一七日　同
（佳）塀外へやつと果物なりはなり　貴山
（佳）かぶり付く西瓜に種がなかりせば　麥郎
（佳）檜重ねがくの林檎の線に猫眠る　愚陀
（佳）枇杷熟れて不良少女の夜となり　東洋鬼
（佳）折詰に林檎ばかりが巾をとり　豆佛
（佳）思案顔客へバナナ、やどんと置き　同
（佳）門司の朝バナナに青い雨が降り　葉平
（佳）櫻桃のクリーム色に涌く想ひ　靈壺
（佳）果物屋夏なら夏のやうにつみ　靖弘

(佳)トマト好かぬ娘の髪の艶やけく　琴人
(佳)なつものは罐詰で賣る果物屋　公二
(佳)五圓也い正札つけてゐるメロン　繁坊
(軸)旅の留守林檎がくさりかけてゐる　路耶

席題　ボート　東洋鬼選

ボールはづして澄きつた空　さだを
木枯しにボートの腹のなほ寒く　愚陀
ボートに乘つて女工の嬉しい日　靖弘
こんど來る事もボートできめてゐる　村樂
釣竿へ癩に觸つたボート來る　紫明
貸しボートモダンガールの梶で行く　愚圖坊
ボート屋の晝寢へ暑い日が當り　かほる
ボートから岸に居ぬが馬鹿に見え　孤舟
あゝさんとボートは岸を離れたり　路耶
ボートの灯夜の川面を樂しげに　公二
橋下へゴール氣取で漕いで入り　麓生
青春へ呼かけるボートの灯　豆秋
沖へ出たボートあぶない物に見え　黄蛾
曳舟の煙ボートへ這つて行き　憲太
云はぬこつちやないとボート屋あやまて　源坊
出拂つてボート屋下足番のやう　同
ボートさへ漕げぬ息子へ嫁が來る　豆佛
子を連れてやつぱりボート止めにす　同
蠣船にボートに橋に夏の色　黒天子
夕暗の灯を縫ふてゐる貸ボート　同
翌る朝ボート哀れく濡れて着き　町二
日曜の寮のボートは島へこぎ　同
(人)艇轉んでボート搖れるにまかせ　同
(地)大川へ出るとボートが光るなり　かほる
(天)ボート屋へ薄い雜誌が忘れもの　同
(軸)ボートの二人見てゐる二人へ柳ゆれ　東洋鬼

席題　迷信　山雨樓選

迷信と云ふて居れない床に就き　山月
迷信にさからはづして年頭　村樂
藁一すじに摑む氣で居る　愚陀
迷信へ丁度息子に熱が出る　豆佛
迷信を默殺したる作業服　亂耽
父の病氣へ母の迷信　靖弘
その釘を抜いて母親全快てき　憲太
迷信にされて母親云ひ返し　紫明
家相でも悪いか店のさびれかた　公二
迷信へ藥いよ〳〵にがきかな　露斗
迷信とはつきりみせた雨が降り　里十九
迷信の今日はふさぎの虫となり　路耶
迷信へやたらに今夜星が飛び　豆秋
迷信へ無花果の葉がかぶさつて　同
迷信にしても茱柱朝を立ち　源坊
迷信を笑へぬシヤクリ止つたり　同
落目になつて迷信へすがり　町二
迷信をしかと姑に教へられ　同
迷信の奇麗に住んでヒステリー　琴人
迷信だよと廐雀へ出かけてき　同
迷信の懸命と云ふ手を合せ　同
(人)お水貰ひに脚氣出かける　公二
(地)迷信はお札の事でもめてゐる　琴人
(天)迷信に雲が下りてる山の上　黄蛾
(軸)迷信へ理屈が出來て威丈だか　山雨樓

席題　單衣　紫　明選

女將の明石夏やせもせず　露斗
單衣着て母の一週忌も近し　孤舟
單衣着て中の島まで來てしまひ　菩香瓏
單衣着た倅の脊のひよろ長し　山雨樓
糊こはき單衣に國の母をこふ　愚陀
たそがれの心へ單衣マツチをすり　亂耽
道ぶちに單衣の柄が地味すぎる　英耶
もう柄を云はぬ女房の單衣物　琴人
妻を亡ひて
縫かけの單衣から湧く悲しみ　葉平
五月晴目のよる所の單衣柄　憲太
單衣着て散髪に行く日本晴　豆佛
育ち行く吾が子の單衣短かくて　武藏坊
單衣物下駄眞黒にして戻り　さだを
暮口に單衣の袂重くたれ　東洋鬼
單衣物疊へあぐら組んで居り　貴山
單衣では寒しシトシト降り續け　源坊
單衣ものに着かへて丁稚膝がみえ　同
單衣着て氣輕に街を歩いてき　路耶
派手な顔をいよ〳〵派手にした單衣　同
(五客)痩せて居る單衣金入落ち　麥耶
(五客)猿又の晝寢へ單衣着せかけ　且洲
(五客)洗濯の儘の單衣でやつてくる　さだを
(五客)單衣着た朝のミルクの舌ざは　町二
(五客)明石着ながら夏をやせてる　露斗
(人)コーヒ呑む丈のお金はある單衣　狂雨
(地)單衣着る頃の貧乏目に立たず　明佳
(天)失職の單衣が骨にあたるなり　亂耽

席題　朝顔　町二選

朝顔に話しかけたい早ふ起き　黒天子
朝顔は世帶の裏を知らず伸び　黄蛾
空家の隅に咲いた朝顔　豆秋
むつくり起きて朝顔の前　山雨樓
朝顔へ蚊帳にも一人兒が殘り　紫明
薄情な表情だれ朝顔の彼女　愚陀
朝顔を四五鉢咲かせ無事に住み　琴人
朝顔のこゝ迄伸びて一つ咲き　露斗

朝顔に怒りも解けて微苦笑す　久郎
朝顔をちぎつて我が子達者なり　孤舟
解雇された頃を朝顔咲き揃ひ　同
湯上りの子が朝顔を並べ替へ　苦香瓏
朝顔の水を病む娘にまた云はれ　同
朝顔のつるが借家を忘れてる　亂耽
朝顔の如き資本家とも思ひ　同
減給を諦め朝顔へ水をやり　東洋鬼
朝顔を見ながら茶漬食ふ親子　同
(佳)朝顔の白ばつかりへ訃報くる　同
(佳)朝顔は朝日を待つてゐたのなり　貴山
(軸)朝顔並べ手洗鉢の水換へてゐる　町二

席題　マネキン　互選

マネキンは自分の欲しい柄を脱ぎ　源坊
マネキンと見なほしてゐる娘なり　里十九
下足番ちよつとマネキン見に上り　豆秋
マネキンを洋裝斜にながめたり　露斗
休日のマネキンやたらに喋るなり　双車
マネキンは人人人の渦に立ち　綠雨
マネキンの瞳男が馬鹿に見え　狂雨
マネキンの踊つて見たい姿なり　同
マネキンの顔そむけたい人がくる　公二
マネキンは不意に背中が痒くなり　同
マネキンに笑ひともない日が續き　山雨樓
マネキンは見返す瞳もつてゐる　同

本社同人社友會

六月十四日夜　於本社倶樂部

風薫る初夏の一夜カナメ喫茶店櫻上の本社倶樂部に同人社友が集ひ、本誌の發展策を語りビールの滿を引き大いにメーメルを擧げた(ひろし記)

參會者　路郎主幹、綠雨、かほる、琴人、雨町、山雨樓、新水、鮎美、愚陀、貴山、五輪公二、里十九、ひろし

壁　路郎選

白壁を人手に渡し都へ出　琴人
壁にすら見くびられてる朝寢する　山雨樓
子のとゞくとこまで壁の汚れてゐ　鮎美
壁にもたれて世の中を知り　新水
あら壁のまゝで人手に渡つてゐ　貴山
住慣れて壁に手入れの行屆き　公二
貸しさを知らぬが如く壁の色　雨町
喫茶店カフエにしたい壁をぬり　同
酔ひ痴れて壁のましろき痛みかな　愚陀
話しかけんに壁は極度に白きかな　同

川柳雜誌社　松山支部五月例會（松山）

五月十七日　久保豊旅館にて　岩本素人報　樹選

兼題　金魚　水

差水へ金魚の搖れる太い腹　松葉
三疋が十錢と言ふ金魚買ひ　玄々子
藪に集ふ金魚に今の吾は似て　拓水
銀ブラに涼しさ見せる金魚鉢　京火
金魚ふとホークの音に驚きぬ　素人
尾につれて金魚の糞の搖れる晝　浮錨
金魚鉢買つて來る間の洗面器　靈芝
雨一つ二つと輪に浮く金魚　五健
(佳)金魚屋の素通り出來ぬ井戸がち　浮錨
子寶へ金魚屋どこいしよと下し　破扇
繪日傘の丸さへ金魚買はれてる　武子
握りたい手付で金魚見詰めてゐ　春峰
やゝこしう數へ損れて金魚買ひ　五健
(軸)惚れてゐる二人へ金魚饗を見せ　水樹

兼題　家出　五健選

家出者みんな上りの汽車にのり　建人
借金と言ふ程ない家出なり　花之助
書置きでそれと知つたは後の事　松石
悔ゆる日の續く家出の水枕　青帆
家出した記事がレビユウの樣に出る　靈芝
家出した二人は辛い世を覺え　紫石
家出して見ても淋しさついて來る　破扇
思ひ當る事が家出の母の胸　素人
お隣も家出しさうな娘居り　玄々子
解決がついて歸れと四號文字　榎影
先妻の里で家出へ足がつき　素泉
家出した時も矢張り雨だつた　晃
(秀)國の事など忘れ家出は眉を引き　素人
意氣地ない自分に飽いて家出する　浮錨
眞相をホテルで語る令夫人　京火
言ひ合つた樣にベンチに寢る家出　松石
置手紙まゝ母だけを喜ばせ　水樹
家出した胸に都の廣い空　春峰
(軸)家出人餓の線から引返し　五健

兼題　夏帽　素人選

出勤の夏帽一つよく目立ち　靈芝
階級を外れて夏帽丘に寢る　松石
ちと早い夏帽を被て旅に立ち　水樹
逢曳へ空が明るい夏帽子　素泉
マネキンの頭に似合ふ夏帽子　川の字
退院の日を新しい夏帽子　青帆
轉寢の顔に帽子の覆をする　五月

夏帽の焦げてる方が兄のなり　拓水
夏帽の大阪辨がよく喋り　大鷲
夏帽の汚れ闘士とやらの痒せ　五健
校長の夏帽赤く焼けたまゝ　大樓
夏帽へパチリと太い雨の音　榎影
夏帽に成つてステッキの輕さ　武子
棧橋を大きく歩くヘルメット　浮錨
（軸）夏帽の夜を散歩がして見たく　素人

席題　薄化粧　玄々子　選

薄化粧　昔を偲ぶ派手な柄　川の字
病人は病人らしい薄化粧　太鷲
轉任の日を先生は少し塗り　青帆
湯上りへ輕くつかつたぱたん刷毛　素泉
うつすらと天凛の美が覗はれ　榎影
名門の育ちをすてぬ薄化粧　水樹
人の噂も七十五日薄化粧　素人
薄化粧れつから薪が燃付かず　々
薄化粧もう黒朱子の帶を締め　武子
生活のための朝々薄化粧　々
聞きわけた娘涙へ薄化粧　紫石
不具の娘もあきらめかれた薄化粧　々
（佳）病弱を見せまいとする薄化粧　水樹
演壇にたつた日園長薄く刷き　榎影
退院に母がすゝめて薄化粧　五健

川柳雜誌社　**糸屋町新人會**（大阪）

五月十八日　於豊田百鈴居　枝松規堂報

森田耕兵君より「甲種合格竿頭の鯉高し」の電報が來る、雜吟の清記互選と批評に可成り夜を更かす、高點は新進ゆき女君に得られて一同呆然

題　雜　騎兵　花嫁　互　選

ひやかしさでも思つてか立つて來ず　一騎
丙午花嫁よそに本を讀み　耕兵
生前に植えたつゝぢの咲いてゐる　ゆき女
もらはれて行く妹は誰されろ　同
花嫁の化粧が長い春の朝　三九
花嫁のちさうつむいた影になり　規堂
のろけ云ふても懷の淋しい　トシオ
花嫁姿に母親涙ぐみ　莢一
落馬したことを云わない騎兵なり　同
騎兵が乘れば馬もおとなし　正博
アゴヒゲの騎兵一トしを目立つなり　同
軒の低さに花嫁の髪　舟々
噂を衝いて花嫁の風呂　同

川柳雜誌社加古川支部　**耽柳會句報**（兵庫縣）

五月二十日　水田光穗報

汗

一粒の汗は大地へ吸はれゆき　洛陽
勞働の汗はからし炎天下　同
戒めの中に尊い汗があり　泰山
汗して働いた日の風呂上り　同
初年兵汗の匂ひで會ひに來る　篤男
妾宅で一汗入れた金魚賣　同
汗かいて來たのに汽車は出て終ひ　みや子
重さうに見せずひく馬汗ながし　同
砂に汗落して梶に力瘤　光穗
蚊の憎さ動けぬ迄も吸ふて居り　泰山
蚊やり香部屋に籠つて重い晩　篤男
蚊が吸ふよ今情熱にたぎる血を　光穗
思案する顔へ來た蚊を憎う打ち　みや子
蚊を追へる手は空に鳴つており　浴陽

六月五日　財布

念を押し〳〵財布持たされる　洛陽
空財布と知りながらフト開けてゐる　みや子
墓口の入れどころない夕涼み　光穗
其艶は苦勞を共にした財布　泰山
黒繻子の帶の間から縞財布　篤男

川柳雜誌社守口支部　**五月例會**（大阪）

五月十七日　於テツヵ倶樂部樓上　朝田新水報

席題　平氣　互　選

平氣な男になつて金が出來　あきら
犯人の寫眞の顔は平氣なり　テツヵ
炎天も平氣で岩に小半日　當り矢
別れても平氣で過す夜い長さ　新水
へそくりが出來て平氣な妻であり　蒼太
あんまりな平氣で聞けぬ噂なる　同

席題　大袈裟　互　選

大袈裟な夢見て暮らす男なり　テツヵ
大袈裟に書く新聞のよく賣れて　當り矢
大袈裟に肩をすぼめて淋しいのう　蒼太
大袈裟に娼婦の媚びし夢もあり　同
チョンぬげに舞妓大袈裟に手を合し　あきら
宣傳のビラ程店のはやつてず　新水
大袈裟に口すべらして奢らされ　同

川柳雜誌社　**御旅支部六月例會**（大阪）

六月八日　於廣田屋　櫻井圓角報

兼題　浴衣　路郎　選

人形に着せてる浴衣買つて欲し　路烏

浴衣着で輕井澤など語り出し　靈壺
マネージャーはNaegaa樣の浴衣が　同
ボーナスは家中浴衣買ふただけ　習々
大柄の浴衣へ包むだ曲線美　翠夢
浴衣きてのりを氣にする子になれり　圓角
浴衣位と安請合のつらひこと　多郎

兼題　男　路　郎選

まこともには女を見ぬが醉ふて居る　路烏
も少しのとこで天下は横にそれ　圓角
世も人も欺き終す氣の強さ　同
戀もなく青年團の幹事なり　靈壺
姙娠をお蔭樣でと云ふ男　同
女には失業が無いと嘆いてる　翠夢
男をば立てるに淋しこの財布　同
男性の意氣は揚れりもう一杯　同
(人)十字架の提灯提げてゆく男　靈壺
(地)自惚が道に女給をなぐつてる　路烏
(天)よくよくの口説き下手は生れたり　圓角
(軸)一合の酒だに女口を出し　路郎

席題　裸　路　郎選

裸の子へソの上まで泥をつけ　靈壺
眞裸になる氣になれば救けやう　翠夢
なにもとの裸になればよいと云ふ　圓角
齒に衣を着せずに話す友となり、　多郎
(軸)素つぱだかわが亭主にしてくれた　路郎

席題　混雜　路　郎選

眞ひるまの花見電車に尼二人　靈壺
混雜の中にコーヒー守つてる　圓角
混雜へ標旗を幹事かざし立て　翠夢
はれ時に特等席はれたまれる　多郎
(人)混雜は幹事の意志を踏みにじり　翠夢
(地)混雜にまぎれ怒を消して見る　多郎
(天)混雜を云ふは獨りで出る氣なり　圓角
(軸)混雜の端へ壺ひは押し出され　路郎

川柳雜誌社　平野支部句會（大阪）

五月十二日　於且洲居　熊本　黃蛾報

席題　夜　露　助　六選

夜露淋しく秋の日短し　春波
やるせない思へ光る草の露　公二
水車小屋夜露の降りる頃の音　黃蛾
(軸)ぢんぢんしよぶ夜露の家根　助六

兼題　心　配　黃　蛾選

心配の女房に響き高すぎる　助六
心配の父の笑顏は子から出る　同
心配は娘の行方まだ知れず　春波
顏色に出た心配をたづねられ　且洲
降る中を思いあまつて明かしに　公二
心配のうすらいで行く体溫器　同
(軸)心配へ牡蠣破り小屋の唄ふ聲　黃蛾

川柳雜誌社　梅田支部句會（大阪）

五月十二日　於里十九居　永田里十九報

兼題　他　人　琴　人選

出戻つて近所の人のひやゝかさ　夕鐘
段梯子を他人の聲で送り出し　美芳
他人になつて働くと云ふ　里十九
世話好きの内輪の事はほつておき　同
他人ばかりで番茶が冷へる　觀月
他人から意見をされて醉ふてゐる　同
(軸)人前を他人めかして座を外し　琴人

兼題　緋縮緬　かほる選

鬣名へざこばからくる緋縮緬　里十九
四疊半緋縮緬こぼれてゐこぼれてる　美芳
毬歌へ秋こぼれる緋縮緬　琴人
春の樣な衣桁を辷る緋縮緬　同
緋縮緬子猫寢ながらたはむれて　ト居
緋縮緬春だ春だよひるがみれ　同
緋縮緬の端切れで出來た撥袱紗　夕鐘

八百屋お七

お七の襦袢は赤し空赤し　同
(人)緋縮緬今さちがつて品が良い　觀月
(地)白い肌包んでしもた緋縮緬　夕鐘
(天)大阪へ來る時買ふた緋縮緬　觀月
(軸)緋縮緬すあしが好きで素足なり　かほる選

拳骨　互

拳骨で豆板を割る雨が降り　美芳
拳骨はやがてコツプの中の水のみ　觀月
拳骨の耳から五錢落ちるなり　かほる
拳骨の後ろ仲居が通るなり　同
拳骨へ小供とう〳〵つかまらず　夕鐘
東西屋が來て拳骨をおろさせる　同

臍　互選

大ぜいへ臍まで見せた支那奇術　里十九
おとなしく臍をいろうて日向ぼこ　觀月
乳ボーロ臍へ當てゝはつぶすなり　かほる
布袋の臍へ三年越のゴミ　夕鐘

ぺんちやら　互選

ぺんちやらへもう出かけてる田舍もの　美芳
ぺんちやらは頑固のうしろそつぐなる　琴人
ぺんちやらもゝうとる年になりまし　里十九
ぺんちやらやおまへんほんまだす　同
ぺんちやらは一ぺん後へ戻つて來　觀月

べんちやらのふと氣が付けば飯がエ　同
べんちやらへ餓かに雨が降つてくる　同

川柳雑誌社
天王寺支部　**同人句會**（大阪）
五月二十四日　於内藤製作所須崎豆秋報

席題　藤椅子　公二　選

藤椅子に投げ出された夕刊　海洋人
夜更かしの身に藤椅子の冷へて居る　裸人
眠られず又藤椅子へ掛けて見る　武藏坊
藤椅子で摧取すること考へる　豆秋
（軸）藤椅子の指圖に小枝きりとられ　公二

席題　糸　豆秋　選

泣き事を言ふて糸屑切つて居る　裸人
考へて居ればミシンの糸は切れ　武藏坊
嫁ぐ日を控ゑ嬉しう糸を卷き　公二
糸たぐる子へ夕陽が丸ろく　海洋人
（軸）朝のしゞまを蜘蛛の糸飛ぶ　豆秋

席題　草　豆秋　選

雑草の花は本氣で咲いて居る　豆秋
草が吸ひ込んだ牛乳の殘り　海洋人
草をちぎつて返事のにへ切らず　裸人
若草へくたびれ切つた身体なり　武藏坊
生きて行く力を屋根の草に見る　公二

川柳
雑誌社　**螢ケ池支部句報**（大阪）
六月八日　田中紫浪報

金魚　かほる　選

腹を返へして金魚喜ぶ　湖舟
金魚鉢とつくり見ると二疋なり　重郎
すぐに死ぬ事を知つてて金魚買ひ　松露
僕の傘昨日金魚になりました　紫浪
金魚ゆれてゐる涼しひ夕　武郎
猫の聲今朝も金魚が足らぬなり　芳秋
金魚の光り晝寢のまぶしさ　緣雨

祭　雨　町　選

別嬪を見つけて神輿よくゆれる　潮舟
夏祭涼みの足で拜がまれる　同
四ッ辻で神輿は少しもんで行き　松露
祭には寄せてもらふと便りが來　同
一廻りして地車は汗をふき　紫浪
浴衣一枚子らの祭よ　武郎
病人の見る夢でなし夏祭　芳秋
どんどんとひゞく祭の氣持になり　緣雨

川柳
雑誌社　**六月例會**（松山）
六月七日　於金龜館　西山玄々子報

兼題　團扇　玉健　選

臺所で一生暮す澁團扇　拓水
御量負に團扇一本添へて　吳れ
うたゝ寢は團扇の上へ顏を伏せ　京火
打ち落す蚊團扇の風を喰ひ　玄々子
逆らはぬ樣に女將の絹團扇　松葉
座蒲團の數だけ團扇出して置き　紫石
水ものゝ皮をのつけて出る團扇　夢郷
（秀）澁團扇借りて又貸す風呂上り　水樹
（同）煽ぐでもなしに團扇を弄つてる　五月
（同）煮へきらぬ返事で廻はす絹團扇　玄々子
（同）もう勝つた將棋に團扇音を立て　青帆
（人）晩酌の氣嫌團扇の風が來る　草人
（地）團扇ちと眠むくなつたか風がそ　水樹
（天）書生部屋團扇に皮肉書いてあり　春峰
（軸）吳服屋の團扇に暮し向きを見せ　五月
團扇ではどうにもならぬ油蟲　同

兼題　鼻　水樹　選

こんな鼻じやないと抗議の出る浸畫　春峰
鼻の出る子供へ元氣賞めて去に　松葉
うたゝ寢の鼻をつまんで起こす伸　拓水
冷やかにあちら向いてる鼻の線　夢郷
事務服に勝ち氣を見せた鼻化粧　武子
出來上る漫畫の鼻は膝を組み　草人
臨終に小鼻の動き見つめられ　玄々子
よく鼻がきくのを笑ふ病上り　五健
ビスケット一つに象の鼻は媚び　同
（秀）冷たさを鼻の高さに感じたり　夢郷
（秀）鼻先へ寒さを見せて子は戻り　青帆
（秀）車中フトみんなの鼻に興が湧き　五健
（軸）眼の玉へ自分の鼻が映るなり　水樹

兼題　朝　玄々子　選

朝の雪イの一番に踏んで行き　五月
留置場の朝に見かへる醉が醒め　松葉
滿願の幟へ朝の陽が溢れ　青帆
カフェーの朝へ煮豆屋鈴を振り　夢郷
寢過ごした朝を笑つて出る二人　春峰
出稼ぎへ逆ふ樣な朝の雲　紫石
夢心地うつろな胸を朝歸り　松石
地下足袋が冷めたい朝を踏んで出る　拓水
ソーダ水朝の氣持を取りもどし　武子
あきらめた朝を明るく拭き掃除　同
一番へ今朝味噌汁が出來損れ　水樹
牛乳に曉の色伸びて來る　五健
（秀）避暑地から朝の空氣を羨ませ　水樹
（秀）氣忙しい朝を小言で出る勤め　青帆
（秀）失業の兎に角歩く朝を出る　五健

（軸）朝の氣を吸ふて歸れはお茶が沸き　玄々子
　　席題　郵便　選　五

郵便屋確かに届く音をさせ　武子
配達のニンマリ渡す繪封筒　春峰
待つてゐる門を郵便素通りし　夢郷
書留の聲が戀しい寄宿生　拓水
親如が委細の郵便待ちあぐみ　松葉
郵便屋勝手を知つて讀んでくれ　五月
同居へ附箋だらけで來る手紙　青帆
書留に脱ぎかけた肩入れさゝれ　玄々子
郵便の聲ほどにない届きもの　水樹
待つてゐた便り郵便禮を受け　五健

　　席題　慰勞　選　五

慰勞會幹事ばかりが寄つて居る　松石
慰勞會小唄で戻る終ひ汽車　五月
慰勞休貯めて旅行の忙がしさ　青帆
失業の長さに足らぬ慰勞金　夢郷
晩酌の慰勞へ妻の口が過ぎ　紫石
神經の鋭く今日の慰勞金　武子
金一封慰勞にしては多う過ぎる　玄々子
イヽ景氣實は慰勞と判るなり　水樹
割前でチトあてつけの慰勞會　五健

川柳雜誌社　**梅田支部句會**（大阪）　水谷鮎美報

　　兼題　水　車　かほる　選

雨蛙水車へ飛んで流される　鮎美
水車小屋春の日和の音がする　觀月
水車くる〳〵廻れ夏がくる　ト居
水車の横に國旗を立てゝ　里十九
ラブシーン水車バックに出來上り　夕鐘
（秀）水車小屋螢は不意に落される　鮎美
（秀）こしらへたように水車の梅が咲き　同
（軸）歸りには小さく見へる水車　かほる

　　兼題　珍　客　新水　選

珍客は田舍に住みたい鍬をもち　ト居
珍客と見てカンテキを煽り立て　夕鐘
珍客は朝の空氣をほめてゐる　觀月
珍客はまた山芋の土産なり　里十九
おしろいが匂ふ珍客ばかりなり　鮎美
（人）珍客へ二男よつぼど背が高し　夕鐘
（地）珍客と向ひあひたる秋の庭　鮎美
（天）珍客の皮肉を笑ふばかりなり　同
（軸）珍客へ空の模樣が變るなり　新水

　　兼題　すゞらん　かほる　選

すゞらんの模樣が好きな許嫁　夕鐘
すゞらんの花にしたしむようになり　觀月
すゞらんのしろさよ戀のうつけ者　鮎美
（人）下宿する身にすゞらんの優しさ　ト居
（地）すゞらんをもらつて机かたづけ　夕鐘
（天）すゞらんがあんまり白い田舍の子　同
（軸）すゞらんの二人でつけたよう咲き　かほる

川柳誌雜社　**糸屋町偶會**（大阪）
五月二十八日夜　於舟々居　同人報

　　題　決　心

決心の何時しかにぶる春景色　流星
決心を算筒の鍵に見せられる　壽仙
許されぬ時の決心などもして　舟々
決心をさせたが母は案じられ　同
決心をうながす樣な手を握り　規堂
決心へ出刄切れさうに光つてず　同

川柳雜誌社守口支部　**六月例會**（大阪）
六月十二日　於カフェー當り矢　朝田新水報

　　兼題　夏の街　綠雨　選

うす衣が透して見せる夏の街　燦郎
擦れ違ふ夏の女に胸をうつ　卯三
夏の街鈴虫の泣く聲も有り　當り矢
畫盛り街一筋の砂塵なる　若太
夏の街一雨ほしい砂ぼこり　あきら
フエルトの飛ぶとこへ來た夏の街　源坊
夕立にはつきり青い夏の街　鮎美
夕涼み街の娘を見て通り　壽嘉乃
三越を出れば日傘に風があり　同
夏の街向ひを見るに手をかざし　新水
夏の街二階に見える走馬燈　同

　　席題　みつ豆　鮎美　選

みつ豆の値を聞き直す國の兄　當り矢
みつ豆へ一汗いれる扇風器　あきら
特製と云ふみつ豆へ油虫　同
みつ豆へダイヤの指のよく光り　新水
みつ豆の客があつさり歸るなり　同
（軸）姑も嫁もみつ豆黨であり　鮎美

　　席題　女　席　互　選

家族づれ女席へも平氣なり　テツガ
婦人席一人派出なるコンパクト　あきら
女席子供ばかりは笑つてゐ　蒼太
ホヽ〳〵と膝も動くだろ女席　燦郎
女席巡査時々目をくばり　當り矢
探しあてずに女席をはなれてゐ　綠雨
女席からむし熱い風が吹く　同

女席おばんの席がとつてあり　新水
三味線と合してゐるも女席　同
黒襟が火鉢をもらふ女席　鮎美
女席みかんをもつて子は眠り　同

川柳雑誌社　昭和四年一月十五日夜　於實業會館　川合舟々報

糸屋町支部句會（大阪）

（舊稿）

兼題　番　頭　ひろし　選

入口をまたぐと番頭　醉が覺め　双葉子
色街へ來ても番頭かしこまり　蒼梧樓
遊興税も入れて番頭はじいてゐ　三笑
番頭の云ふ通りにして叱られる　赤城
藤助はん電話口まで呼出され　彩秋
番頭を頼りに藏の壁が落ち　毒仙
番頭が出て變つたる柄を見せ　新水
尤もと番頭煙管吸ひつける　同
番頭の手には息子の弱々し　翠峰
番頭へ何んにも云はぬ親旦那　同
丸刈になつて番頭貯めている　加香
番頭の近頃嬉しい指輪なり　同
番頭も床屋へ贈儀やつてゐる　同
（佳）あれもこれも番頭は裏切られ　同
（軸）若主人番頭と意見異ふて來　ひろし

席題　とんど　互　選

もう消へたとんどに見せる白い足　毒仙
尻からげしてとんどから一人退き　かほる
隣の子とんどすることふれてくる　新水
からけしを取るにとんどのせわしな　蒼梧樓
とんどのあとを犬かいでゐる　赤城
行きすぎた丁稚とんどへ戻つて來　双葉子
とんどから温ふ戻つて茶を沸し　陽喜亭
とんどもうしめりがちなる世帶　三笑
巡査まだとんどにあたりつゝ叱り　源坊
とんどを横目に辨當かゝへ出る　ひろし
あたらしてもらふとんどへ炭俵　翠峰
燃へ切つたとんどへ立つた病み上り　同

靈場めぐり（その一）

水谷鮎美報

五月廿七日

雨の勝尾寺へ

河麓鳴く雨にけむるよ勝尾寺　ト居
石垣の蔦に雨好し勝尾寺　同
山門のくつきり赤し勝尾寺　同
降りしきる雨に札所の靜なり　鮎美
石標に毛虫が匍ひぬ雨のなか　同
草蟹の眼にみなおき雨のなか　同

冬害居川柳偶會（金澤）

兼題　曲　めかくし　選

しやがんだまゝ女の嘘を聞き　旭虹
曲馬團馬を話して居る　同

席題　黒　人　紅の花　選

曲馬團黒人一人象と住み　旭虹
もの珍らしく黒人が欠伸をし　めかくし

席題　鐘　銀砂子　選

大望のある早立を送る鐘　紅の花
杜若閉くに宵間の河に鐘を聞き　同
鐘が鳴る鳴る夕飯の味　冬青
留守番をさせて氣になる鐘を聞き　同葉子
鐘の音を聞いて其の日もつゝがなく　一角坊

綠雨居偶會（大阪）

五月十七日夜　橋本綠雨報

願　書　互　選

嘆願書長屋が寄つてできあがり　公二
眞實の自分となつて願書出來　柳影
眼鏡を拭いて願書を見直す　綠雨
えらそうに言はれ願書の書直し　同

濕　布　綠雨選

濕布ふすると父は淋しい顔になり　柳影
濕布してから電灯の明るさよ　同
長患ひ濕布をせねばならぬ咳　公二
しめきつた部屋へ濕布の湯がたぎり　同
（軸）咳一つ濕布の夜を別れたり　綠雨

偶會（大阪）

五月廿二日　於民衆バー　須崎豆秋報

題　美容院、朝寢

美容院孔雀のやうに出來上り　豆秋
美容院亭主二階に居る樣子　公二
美容院田舍娘の眼にとまり　雨町
朝寢へプロペラが通り過ぎ　豆秋
小言きゝ乍ら朝寢の快ろよく　公二
手のとゞくところに朝寢の蓆盆　雨町

北陸の旅から

橋本綠雨報

六月十日

六月九日の夜行で舊同人の芦穂、雅幽その他山月君とで曹洞宗大本山永平寺に參詣し、三國の東尋坊から芦原温泉へ廻遊致しました、

信心の連れに洒落云ふ　人があり　芦穂
家も屋敷も賣つて信心　同
これからは信心だけと床につき　山月
足弱を念佛で待つ仁王堂　同

信心の人本堂にあふれて居　緑雨
信心にお寺は近いものにして　同

靈場めぐり（その二）

水谷鮎美報

六月三日
三室戸寺から三井寺へ
道端にひとりぽつちの牛がゐる　卜居
ごゆつくり僧も食事に降りて行き　同
朝日射す方へ木の芽はのびてゐる　鮎美
板橋を渡れば晴れた水の音　同
訪れば人居ず蟬の聲ばかり　同

かほる居偶會（大阪）

高橋かほる報

五月廿五日
思ひつきよいがお前につとまるか　公二
思ひつきわさびを買ひに走らされ　かほる
天井の音に二人は顔を上げ　公二
頂上でぐるつと廻はる二人連れ　かほる

南海昭和至誠川柳會（大阪）

竹内多聞報

五月十二日午後六時　於　天下茶屋集會所

席題　失業　互選

（一點）失業を賣り歩いてる石鹸屋　籬下
雨降らばふれ失業の氣安さよ　五輪
失業に始めて郷を思ひ出し　曙水
失業者よその罷業を應援し　飛水
失業は子の泣き聲に目をつむり　烏莊
失業に命短かくなつて來る　瓢山
失業者親子の仲も裂いてゐる　天全
失業をしたステッヤの突き加減　青砂耶
失業の經驗もない私し達　天耶
（二點）失業者未だ喰ふ丈けの道が　樹光
失業の始め近所へ氣兼ねもし　竹石
二階借失業の兄訪れて來　格子樓
失業は内へ這入るに靜かなり　畑井
失業の目に水撒きの足が見え　多聞
失業の家がだん〳〵暗ふなり　籬下

右から芦穂、緑雨、雅幽、山月の諸君です福井驛にて山月君の撮影

失業は千日前へ廻つて來　黒天子
失業の始めて妻の力を見　一泉
失業して妻にやさしい亭主となり　烏莊
笑つたが今日失業の我れであり　萬兩
（三點）失業は乳兒の泣く聲聞い出す　萬兩
しよんぼりと家へかへれば妻の笑　樹光
プラジルに行くといふのも失業者　黒天子
失業の目に編上げのよく光り　多聞

（五點）失業へ矢つ張り鳩はよつて來る　選

席題　團体　互選

（一點）團体は一人のおくれ待たれ　瓢山
團体でうづまるほどに奈良の街　五輪
團体で來ると仲居に疎まれる　萬兩
團体の胸に櫻の花が散り　神代
團体におくれて天氣羨ましし　畑井
團体の割でたのんだ小人數　飛水
團体は此の不景氣を知らぬやう　竹石
團体の先達らしく髭男　五輪
（二點）團体は一人で行けぬと行き　天全
團体に好一對の若夫婦　天耶
（三點）團体でくれば冷たい町の色　青砂耶
團体の笑顔は宿へ落ついて　貴山
團体に酒屋の親爺旗を持ち　格子樓
團体の仲間はづしてもてゝゐる　黒天子
（四點）丹前は先生丈けにあたるなり　多聞
團体の發つ宿丈けが起きてゐる　萬年青
團体に娑さん一人でもてゝゐる　籬下
團体にチトすべつこいアスハルト　一杉
團体は女の事も平氣で云ひ　烏莊
（五點）團体の女の足と合ふ歩調　青砂耶

席題　ケンツク　互選

ケンツクを食つて亦來る藥賣　瓢山
ケンツクで妻に財布を調べられ　萬兩
ケンツクは素うどん丈けでこらへて　多聞

席題　消炭　貴山選

消炭で手ッ取り早やく餅を燒き　五輪

里の母今日も消炭提げて來る　青砂郎
消炭へよつぽど口を尖らせる　多聞

席題　古　鞄　互　選

(一點)古鞄手足出さうに見えるなり　貴山
(二點)臍み拔いた手垢もあらん古鞄　一杉
(三點)古鞄不思議に今日は儲けてる　黑天子
古鞄丈夫な革が反つてゐる　萬年青
(四點)札束は他人の金なり古鞄　五輪

兼題　流行唄　路郎選

境内をよごしおそれぬ流行唄　樹光
口笛は判らぬらしい流行唄　貴山
緣日で覺えた唄の使ひ途　飛水
蹴り歩む友禪模樣に流行唄　曙水
流行唄になつて子供教えられ　黑天子
あゆみつゝ小唄で子守兒をねかし　神代
流行唄時の流れを追ひかける　烏莊
工場のリズムへ流行唄織り込まれ　竹石
姑の氣に逆らつた流行唄　青砂郎
流行唄一ト節違ひ逆戻り　涼哉
尺八の覺へ始めは流行唄　瓢山
かわり行く世相をうがつ流行唄　天郎
母親の機嫌むかしの流行唄　多聞
(人)默つて聞けと流行唄言はぬなり　青砂郎
(同)流行唄何故か我身につまされる　五輪
(同)流行唄犬に追はれて戻るなり　青砂郎
(地)あてもなし艶歌師限りなく唄ひ　格子郎
(同)流行唄丈だけ延びる息子なり　多聞
(天)俺の心も唄つてくれろ流行唄　青砂郎
(軸)れェ愛して頂だいにあきれさせ　路郎
老ひこんだことを思はす流行唄　同

兼題　夢　路郎選

それでゐて夢を展げる暇があり　一杉
夢の人思ひ出せない儘であけ　黑天子
戀し合ふ頃が本當に夢心地　飛水
小さい胸撫でるは夢を見たのなり　蘿下
夢なればこそ助かつた〳〵　畑井
惡夢から熱病のやう起き上り　萬兩
嫁入の支度を夢に見る二十　竹石
さひはひに夢でよかつた膳につく　多聞
春雨に夕べの夢を思ひ出し　曙水
許されぬ仲が夢では出來上り　五輪
親の計に接し先夜の夢の事　烏莊
夢毎に若い昔の事ばかり　涼哉
(人)朝飯が夢の話しで遲ふなり　蘿下
(同)言ひかへす言葉と共に目がまめ　貴山
(同)夢見てから添寢の妻のポカンとし　樹光
(地)見る夢に寄る年波の淋しくて　萬年青
(同)淋しさは百圓札の夢なりき　青砂郎
(天)それからはチト言ひにくい夢になり　同
(軸)山へ行く子をもつて夢のとくに　路郎
母の手紙は夢のことまで　同

南海新聞柳壇

題　海水着　朝陽選

(七月十一日〆切)

天、地、人、入賞の句に南海電車全線一往復乘車券進呈

投句先　大阪府高石町南九九九　太田朝陽宛

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋が出來ました。左の價格でお頒ち致します。此用箋を御使用下さい。

百枚綴一冊　價金拾參錢（送料共）

◇御申込は本社事務所宛（一錢切手代用可）

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさはしい簡素な裝幀に出來ました。

第一卷　第二卷　各金五圓也
第三卷　第四卷　各金參圓也
第五卷　第六卷　各金參圓也
當分第五卷に限り　**特價金壹圓五拾錢**
各送料十八錢

尙古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

第二號より第四十七號まで　各一部　金拾錢
第四十八號より第七十一號まで　各一部　金貳拾錢
（但し一號九號十二號廿一號廿五號廿六號廿七號はありません）

川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇

編輯後記其他

路郎生

▼一ト雨毎に陽射しの痛さを感じるほど暑くなつて來ました。ざくろの花が蟹の爪のやうに赤く光つて見えます。こんなことを云つてる間に海水着の女が海近くうろ〳〵することでせう。

▼前號は私が旅に出る前に、あはたゞしく編輯をいたしましたので「柳壇の人々」の(2)も書くひまがなく、編輯後記も雨町君を煩はしたやうな始末で、いろ〳〵御不滿の點も多うかつたことゝは思ひますが、微力のしからしめるところと叱らないで下さい。その埋め合せといふわけでもありませんが本號へは「柳壇の人々」の(2)と旅の印象記「旅のこゝろ」とを書きました。御愛讀下さらば幸ひです。

▼五月十八日函館で開催された第二回海峽親善川柳大會はその名にそむかずなか〳〵盛會でした。龜井花童子君を代表者とする四十名に近い函館側と小林不涙人君を代表者とする二十名の青森側との握手に、東京からは川上三太郎、矢野錦浪の兩君、札幌からは尾山夜半杖君が出席してゐました。私も席末を汚して持論の一端を述べさせて貰ひました。

▼餘興に川柳小唄振りとして三太郎君の「子供は風の子天の子地の子」と錦浪君の「春を趁ふ夢に嬉しい文が來る」と私の「夕櫻とんぼがへりがしてみたし」とに作曲振附をして主客共に感嘆させられました。新聞紙の報ずるところでは日本川柳界の新記錄だとしてありましたが、それに違ひありません。

▼私は十八日には川柳大會に出席、十九日は大沼公園に遊び夜はひぐま吟社の歡迎をうけ、その後湯の川溫泉に遊び、女子のトラピスト修道院を訪ひ二十三日の夕函館の柳友たちと別れ、二十四日午前十一時すぎ白河に下車して番士小路の大谷五花村君を訪れました。こゝでは能因會の汀舟、葉吉、喜四雄、才六九光の諸君と歡談する機會を與へられ、翌二十五日午後三時、帝都上野につき、前田雀郎君の出迎えをうけて、そのまゝ四谷寺町の西念寺で開かれる西原柳雨翁追悼會の席末を汚しました

▼帝都を去つたのは三十日の午後でした。横濱の紫田五萬石君を訪ふ豫定を變更して、平塚に下車。駒人君に出迎えられて支部に落つき浴衣、駒人、圭二郎兩君の案内で大磯に遊び其夜は支部で一泊。翌三十一日立つてその夜に歸阪いたしました。半月餘の旅途を元氣で愉快に押し通せたのも各地柳友のたまものだと感謝いたして居ります。大變御迷惑をかけましたことを重ねてお禮申上ます。何れ悉しい事は拙稿「旅のこゝろ」を御覽下さるやうお願ひいたします。旅中お訪れしたい方が澤山ありましたが日程がないために失禮しました。悪しからずおゆるし下さい。

▼六月の夜の本社の會はなかなか賑やかでした。私は旅の印象記と共に各地の長を採る意味で函館の句會振り柳雨翁追悼會の模樣などに就て談しました。

▼八日の夜御旅支部の會の歸途圓角、多郎、翠夢、靈壺の諸君と萬よし亭へ行きました。恰度萬よし君も外出先から戻つて來まして大いに氣焔をあげました僕に「圓ゝクを値切つてからの酒に生き」の句が出來ました。

▼十二日の夜例によつて里十九居で月評會を開きましたが、紋太氏の姿がいつになく見えません。差支えればキツト葉書が來る筈ですがと話してゐましたところ、其後舞ひ戻つた葉書に添えてお子たちの悪ろかつたことの知らせを受取ました。一日に二世を儲けられたのと、病氣とあつては出られなかつたのも無理でありません。お喜びやら、お見舞やらを申上げます。

▼六月十四日の夜、社友同人の茶話會を倶樂部で開きました。杏三君は近くベビーさんが出來るらしいので一寸顏出しをしてすぐ引きあげました。五輪君も今夜は仕事があるからと云つて

時間が來るとさつさと歸つて行きましたが、その熱心を買はねばなりません。琴人君はのつびきならぬ用務で中座、殘つた連中はビールの泡と共に十二時すぎまで談笑。尤もその間に句も作れば、社務に對する意見の交換などもあつて賑やかでした。雨町君、公二君の若手連がなか〳〵熱辯をふるひました。もつと倶樂部會合を頻繁にしやうといふ議も出ました。結構々々。

▼近作柳樽の應募句が激增するにつれて月々の選句に困難を感じ遂に一人十句迄に句數を制限することにいたしましたが、近來又々選句上支障を來たす程度に應募句數の增加を見ましたので一人五句までにしてはといふ說も出ましたが、作句熱の旺盛な應募者に對して句數を現在以上に減ずることは面白くないので近作柳樽を二部制として選句難の緩和と發表數の增加を期することにいたしました。從つて應募者は一部（路郎選）か二部（ひろし選）かの何れか一方へ應募して頂くことにいたしました私の選は從來の選句振りよりも一層嚴選にすることにいたしましたから其の點お含み置き願ひます。應募句に一部二部の指定なき場合は二部に投じられたものとして處理いたします。

一部十句迄、二部十五句迄

▼從來特別號にのみ發表してゐました光耀抄を八月號以後毎號發表することにしたいといふ閨秀川柳家達の希望から、今回「川柳光耀會」といふ婦人ばかりの會が新設されることになりました。今のところ幹事は吟女さん、壽枝女さん、武子さん、などにお願することになつてゐます。葭乃も勿論幹事の一人として働くことになつてゐます。まだ事務所を何處に置くか、そこまで具體的になつてゐませんがそのうち會則などもお知せする運びになるでせう。會員御希望の方は兎に角本社內川柳光耀會宛に申込んで置いて下さい。會費は一箇月五拾錢です。句は光耀抄に發表。雜誌一部頒布。回覽雜誌等の計劃があります。奮つて御參加下さい。

▼前號で私の書きました、西原柳雨翁の記事で、亡くなられた日と、年齡が誤植してありましたので、左の通り訂正いたします。慶應元年七月廿六日生れですから六十六歲で亡くなられたので、永眠された日は四月二十七日です。なほ牌名は敎進院川柳居士です。附記いたして置きます。

▼聖城川柳社の高田茶撫郎君から「風見草」を菊版にするといふ賴りに接しました。大いにいゝことだから贊意を表して置きました。發展を祈ります。

▼「番傘」に京の「葵」が合併しました。大いに結構なことです。京の「紙魚」と「野菊」と合併して「川柳街」が生れました。これも大いに結構なことです。合併し得られるものはどし〳〵合併する事です。毛利元就の故智にならうことは決して遲くはありません。ただ合併が經濟的に屁古垂れた關係だけであつてはならない事です。それだと尻が溫まればすぐに分裂するからです。無意義な合併に終らぬやう各社の將來のために私かに祈つてゐます。

▼本社客員、吉岡鳥平畵伯が東京へ移られました。大阪には八年間居られたんださうですが、あまり突然で送別會も出來なかつたのは甚だ遺憾でした。しかし時々來阪されることもあらうかと思ひますのでその際大いに歡迎のグラスを手にしたいと思つて居ります。

▼葉平君の妻君が亡くなられました。「六月の青葉に何も知らずに不二はふとつて行きます」といふ葉平君の賴りを手にしてただ涙あるのみでした。私はしばし茫然としてお悔の辭を述べる勇氣さへありません。合掌。

▼谷脇素文畵伯が講談社から近く川柳漫畵「いのちの洗濯」といふ快著を出されるさうで、小生に口繪の贊を求められました。「そのころの女は いふがままになり」といふ句で畵面を汚しました今から御笑覽を願つて置きます。

化粧柳壇の句を募る

選者　麻生路郎氏

題「海」　七月十五日限

同「女の子」　八月十五日限

「雜吟」　毎月十五日限

「化粧柳壇」と明記のこと。秀逸數名に呈賞。

投句先　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生路郎氏宛

化粧新聞社

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記すること。

▼近作柳樽は一部又は二部のいづれかを明記する事

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこと。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認めること

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他つき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第七卷第九號課題

七月五日締切
（各題十句以内）

▼海　前田雀郎選

▼妹　安井ひろし選

▼涼み　酒井駒人　揚井二南　共選

第七卷第十號課題

八月五日締切
（各題十句以内）

▼秋　蛭子省二選

▼運命　高橋かほる選

▼地圖　住田亂耽　友淵貴山　共選

毎號募集

▼近作柳樽（一部）十句以内　麻生路郎選

▼近作柳樽（二部）十五句以内　安井ひろし選

◇近作柳樽の一部と二部へ同一人で投句することは御遠慮ありたし。

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號　一部金參拾錢
新春特輯號　一部金五拾錢
八月特輯號　一部金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和五年六月廿五日印刷
昭和五年七月一日發行

第七卷第七號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區杭全町六〇三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（爾館）
石塚（京都）三宅（松山）弘文舍

川柳雑誌社關係の人々（いろはの順）

賛助員

池澤樂居　岡田三面子　池田雪峰　山本雨迷　森石竹酒井駒人
大道弘雄　川上三太郎　本田柳一路　増井汀柳　須崎豆秋　淺井冷々子
岡本一平　吉岡鳥平　友淵貴山　近藤テルホ　伊藤綠之助　北山悟郎　朝田新水
片岡直方　吉田清　若井たけし　熊本黄蛾　岩本素人　水谷鮎美
嘉納純　窪田銀波樓　辻左馬　柳川洲馬　岩崎柳路　萬よし庄
田中辰二　安川久流美　永田里十九　楊井二南　伊藤愚陀　**編輯局**（同人）
長崎柳秀　前田雀郎　中原圭二郎　越田久水　石川双葉子　橋本綠雨
國枝史郎　小出榴重　中川めかく子　安西杏三　原史風　安井ひろし
藤村作　柴谷柴舟　中野柳陽　阿形一杉　長谷川一徹　松丘町二
藤本卯之助　篠原春雨　中澤濁水　阿部閑生　太田朝陽　松盛琴人
赤井清司　蛭子省二　中見光路　櫻井圓角　小川三猿堂　福田山雨樓
淺田一　末弘嚴太郎　森東魚　上田柳影　木山青砂郎　龜井花童子　出口雨町
相元紋太　桑原京郎　水田光穂　高橋かほる　麻生霞乃　中島鐵洲主幹
伊藤彦造　松村敏郎　三輪五輪　竹内多聞　住田亂耽
大島濤明　松田多郎　白井梅里　藤里好古　麻生路郎

社友

生田翠夢

客員

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事楊井　二南
山口支部（山口縣）幹事柳川　洲馬
函館支部（函館市）幹事龜井　花童子
小松支部（石川縣）幹事本田　柳一路
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事水谷　鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事田中　紫浪
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
糸屋町支部（大阪市）幹事近藤　テルホ
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
籔川支部（島根縣）幹事伊藤　綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
別府支部（別府市）幹事小川　三猿堂
堺支部（堺市）幹事友淵　貴山
松山支部（松山市）幹事岩本　素人
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井　圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
平野支部（大阪市）幹事熊本　黄蛾

古本屋時代

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

清酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入　定價一圓（送料拾錢）

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありたし

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び
日月は輝く
大衆と共に

麻生路郎著　川柳漫談　價壹圓五拾錢 送料拾八錢
岡田三面子著　寛政改革と柳樽の改版　價貳圓五拾錢 送料拾八錢
同　隨筆　虚心觀　價貳圓參拾錢 送料拾八錢
今井卯木著　誹風柳多留拾遺　價貳圓 送料拾八錢
川上三太郎編　新川柳壹萬句集　價壹圓五拾錢 送料拾錢
同　川柳滑稽句集　價九拾錢 送料八錢
近藤飴ン坊編　新川柳分類壹萬句　價壹圓五拾錢 送料拾錢

西原柳雨著　川柳江戸歌舞伎　價參圓五拾錢 送料拾八錢
同　川柳江戸名物　價貳圓五拾錢 送料拾貳錢
同　川柳參尾志　價壹圓五拾錢 送料拾貳錢
同　川柳吉原志　價四圓八拾錢 送料拾八錢
同　川柳風俗志上卷　價參圓八拾錢 送料拾八錢
武笠山椒著　誹風柳樽通釋　三卷各參圓 各送料拾八錢

柳書取次　御注文は前金の事

大阪文案社
大阪市西成區千本通五の七
電話天下茶屋二九七五番
振替大阪三〇三九二番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和五年六月廿五日印刷納本　昭和五年七月一日發行